

平成22年8月11日開催教育委員会会議記録

1 開会・閉会等について

日時	平成22年8月11日(水) 午前10時00分
場所	教育委員会室
開会	午前10時00分
閉会	午後4時00分
出席委員	
委員長	高木新太郎
委員	高杉政宏
委員	横井利男
委員	鈴木みゆき
教育長	久保孝之
説明のために出席した職員	
教育委員会事務局次長	小暮真人
庶務課長	後藤隆宏
学務課長	藤田悟
指導室長	仁王紀夫
すみだ教育研究所長	須藤浩司
生涯学習課長	金子しのぶ
スポーツ振興課長	宮本知幸
あずま図書館長	渡邊久尚

2 会議の概要

○高木委員長 それでは、教育委員会を始めたいと思います。本日の会議録署名人は高杉委員にお願いいたします。それでは、日程に従って進めさせていただきます。なお、議事の都合により適宜教育委員会を閉じ、休憩することもあるかと思いますが、ご了承ください。

議決事項第1

議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」の案件を上程し、指導室長が説明する。

○**高木委員長** 審議に入る前に、これまでの経過等について確認させていただきます。「墨田区立小・中学校使用教科用図書採択事務取扱要綱」及び「平成23年度使用小学校教科書採択の方針について」に基づき、4月28日から6月4日までの間、教科ごとの教科用図書調査委員会を設けて専門的な調査を行うとともに、6月8日から7月2日までの間、すみだ生涯学習センター内に教科書を展示し、ご来場された区民の方々からもご意見を伺ったところです。そして、6月11日に教科用図書選定審議会を立ち上げ、教科用図書調査委員会からの報告、学校からの調査研究報告、区民からの意見等を資料として、7月2日までの間、計4回の教科用図書選定審議会を開催し、すべての教科書について審議を行い、7月11日に墨田区教科用図書審議会の答申としてご報告をいただきました。さらに、委員の皆さんには7月15日から8月5日までの間、すべての教科書を実際に手にして、教科用図書調査委員会からの報告、学校からの調査研究報告、区民からの意見等にも目を通していただきながら、教科書の細部にわたりご検討していただいていたところです。なお、本日も本会場に教科書、各報告等を用意していますので、必要に応じてご確認いただきながら審議をお願いいたします。審議の順序ですが、国語から順に9教科11種類について審議をいたします。なお、各教科等の審議の冒頭に学習指導要領に定める教科ごとの目標等について指導室長から説明をしていただきたいと思います。それでは、国語について審議いたします。指導室長お願いいたします。

○**指導室長** はい。国語の教科の目標でございます。「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる」となっております。次に、新しい学習指導要領による主な変更点について申し上げます。教科の目標については、これまでと変更はございません。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で構成されております。各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探求できるよう、記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動の工夫・充実が図られております。現在使用している教科書は「光村図書出版株式会社」でございます。全5社からの採択をお願いいたします。

○**久保教育長** 国語の教科書につきましては、今ここにあります5種類から選ぶことになるわけですが、私としましては、結論から申しますと、教育出版の教科書が良いのではないかと考えております。まず、教科書そのものの中身に入る前に、アンケートでも、学校からの調査資料でも、意見が分かれるところがありました。それは、本の厚さの問題です。この三省堂と光村出版ですが、光村出版では、5年、6年生の教科書が上下ではなく合冊されていて1冊にまとまっています。アンケート結果でも、学校調査資料からも、これは少し重過ぎるのではないかとということが強く指摘されていました。これは教科書の選定審議会の答申の中でも同じように触れられていまして、これについては賛否両論あるところです。1年間の見通しが持てるから良いという評価と、それから、やはり重くて登下校時の負担になるのではないかとという評価と、これは両論併記になっていますが、学校調査資料やアンケートの中では、ふさわしくないのではないかとという意見が圧倒的でした。この点につきまして、私はそれほど深く感じていなかったのですが、いろいろ話を聞いてみますと、子どもたちがランドセルに入れて運ぶのは、この国語だけではなくて、様々な教科書やノートや、あるいは筆箱など多岐にわたるわけですし、やはりできれば軽いほうが良い。ですから、ある意味ではもちろん意図を持って合冊になっているわけですから、そのことについて積極性があれば、それはそれで主張を受け止めるべきだとは思いますが、できれば軽いほうが良いということが基本にあるのかなということが感じられました。では、合冊することの積極性がどれだけあるかということですが、率直に言って、

学年の分を通しで見なければ、なかなか学びが進まないかどうかというと、私はあまりそのような必然性はないように思います。そういう点では、むしろ軽いほうがベターではないかということを前提に考えております。そこで、内容の問題ですが、内容がよければ、厚いほうでも良いと思いますが、墨田区の子どもたちに合っていて、子どもたちの課題に比較的応えやすい教科書を選ぶのが基本だと思います。私どもでは毎年、開発的学力向上プロジェクトというのをやっております、その中で小学校の国語についての課題とか、今後のポイントというようなことに触れたものがございますが、うちの小学生の基本的特徴は、A問題、B問題というふうに言うならば、基礎・基本的な意味での読み書きだとかのA問題については、そこそこ到達点にはいつているけれど、B問題というふうに言っていますが、応用的な課題についてはかなり弱点が見られるというのが特徴だということが、国語についての分析の中では明らかになっておりまして、この点の改善が求められる中で、特に書くこと、文書表現で書くこと、あるいはそういう問題については無答率が高いということが指摘をされてきて、この点に着目し、この弱点を補強できるものを一つ基軸に見ていくのが妥当ではないかと思っております。そこで、実際の教科書に当たってみて、いろいろな調査の結果が出ていますが、その中で、いわゆる話すこと、書くこと、読むことという3領域のそれぞれの比率に関して触れた報告書がございます。これを見ますと、非常に特徴的になっています。一言で言いますと、読むことにとっても重点を置いているのが光村の教科書でございます、この3領域の中で、約8割が読むことについての単元になっている。それから、教育出版が7割強になっていますけれども、平均的には68%ということですので、五つの教科書の平均でいうと、光村が突出しています。それから、話すこと、聞くことの単元に量を割いているのは三省堂と東京書籍で、平均が12.7%であるのに対して、三省堂は17.3%、東京書籍は15.3%になっております。それから、書くことにポイントを置いているのが、学校図書で、平均が約19.2%のところ、26.6%を割いていて、突出しています。こうしてそれぞれを見ると、先ほど言った、特に3領域のどこに重点を置くかというところでそれぞれの特徴がかなり出ています。その中で、話すこと、聞くことというところの領域については、学習指導要領の今回の表現の中では、音声言語のための教材の活用の工夫を大いに図るべきであるということが指摘をされてきました。それから、書くことでは、実際に文章を書く活動をなるべく多くすることが必要であるというようなことが書かれていました。読むことでは、日常での読書を促す、あるいは基本的な本や資料を選べるような力をつける。それから、教材としては説明的な文章や文学的文章などのバランス、あるいは文章の形態を調和的に取り扱うとなっています。この辺について少し各教科書の状態を見させていただきました。この音声言語のための教材の活用というところでは、この言葉をどういうふうに捉えていいかよく分からないところがあったのですが、一つはやはり言葉として表現するときの、例えばトーンだとか、口調だとかということになるとすれば、一つは、詩歌とか、あるいは俳句、短歌などの題材を多く取り上げているところがメルクマールになるかなと思ひまして、その結果を見ますと、詩歌が一番多く取り上げられているのは光村、続いて教育出版、一番少ないのは学校図書となっています。特に光村が多いです。特に俳句、短歌の数は87ありまして、突出していると言えます。そういう点では、そういうこと意識はあるのかなという気はいたしますが、ただ、他の文章との関係で言いますと、ここだけがやや突出しているという印象です。全体的にバランスがとれているのは、教育出版が、文学的文章が55.0、それから、詩歌等が76.4、説明的な文書が27.6ということに対して、59、82、30と一番バランスがとれているのが教育出版の配分です。数的にも比較的多いということがありまして、この点で充実しているのは教育出版だと感じました。それから、音声言語でもう一

つ考えたのは、ローマ字です。ローマ字の取扱いは、今回前倒しになりまして、確か3年生からやる予定になっているはずですが。ローマ字の表がどの会社にも付いているのですが、一つだけ気になったのは、光村だけが「ヲ」、w o という表記がないのです。f u で「フ」とか、t s u で「ツ」というのは、みんな取り上げています。それから、s h a とか c h i というのも大体どの教科書でも表で取り上げられています。なぜかw o という表現がなかったのです。音声のローマ字表が早く取り上げられてきていることのメリットの一つは、アイウエオでは分からない言葉の組み合わせ、子音と母音の組み合わせの表記に一番近いローマ字とか、ハングルなんかもそうですけれども、表音文字ですから、そういうものとの比較の中で、音の名で呼ぶ、知るという意味合いもあるのかなと思うと、この表記はあまりよろしくないのではないかと思います。確かに現状の実際の子どもたちの発音はオかも知れないのですが、私はw o にこだわってしまっていて、せつかくローマ字の表でこういうものがあって、例えば「チ」をわざわざt i ではなくてc h i という表記を加えるのなら、w o の表記があってもよいのではないかと思います。これらには意味があるのだらうとは思いますが、私としてはいかがなものかなという気がいたしました。それが話すこと、聞くことに関してです。書くことに関する部分につきましては、これも調査結果が出ていまして、手紙を書く、記録を書く、調べたことをまとめる、その他というふうに固定された形の表が出ています。書くことの中で、手紙を書くとか、その他に書かれている部分というのは、大体日記だとか物語を書くのだと思います。そういう意味では、どちらかという文学的と言っていたのですが、やや情緒的な言葉、自分の内面について表現する力につながり、記録を書く、調べたことをまとめるというのは、どちらかという客観的な事象についての何らかの説明を適切に書くというふうなことにつながる要素かなと思っています。先ほども墨田区の子どもたちの状況というようなことをご説明しましたが、内面的、情緒的な表現よりも、調べたことや記録を書くということで客観的な表現をきちんと身につけていくということの重要性を考えてみたときに、そちらのほうにもう少しシフトしたほうが良いのではないかなという気がいたしました。そこで、記録を書く、調べたことをまとめるという単元の数が比較的多いのはどれかということ、一番多いのが教育出版です。この二つ合わせて20単元あります。東京書籍が17単元、一番少ないのは三省堂で13単元でした。同じ書くこと全体の中での単元数でいうと、三省堂が多いです。49ありますから、41しかない教育出版に比べると多いですが、先ほど言った、記録を書く、調べたことをまとめるという意味での活動については、実は教育出版のほうに重点を置いているというふうな結果がありまして、私はこの点に着目して判断しました。あと、読むことの中で、日常的な読書を促すということが必要だということと、それから、必要な本や資料が選べるということが必要だということも新たに触れられていましたが、読書を促すという点でいえば、もちろん読書の導入がよりスムーズであるということ、それから、できれば読書の紹介がたくさんあったほうが良いかなというふうに思います。そういう点で、調査結果を見ますと、読書について紹介している量が一番多いのは三省堂です。これは合計で428冊あります。その次が教育出版で375冊、あとは367、364、一番少ないのが学校図書で93冊という結果になっています。実は、小学校の教科書選定審議会の答申書を見ますと、教育出版の紹介数はかなり少ないと書いてあります。しかし、実はこれは巻末に書いてある紹介数だけで、ここはそれぞれの各ページの欄外に紹介がいっぱいあるんです。それを足しますと、この数になるので、全然見劣りしないどころか、むしろ多いということになります。これ以外にも、著者名を扱ったところで紹介された書籍数もありますので、紹介例としては多いと言えると思います。それから、巻末の資料の大きさという点では教育出版が突出しています。漢字のページ数だとか、あるいは平仮名表とか、い

ろいろな資料が一番多いのが教育出版で307点、全体の平均が164ですので、突出して多いということが言えます。そういう点では、いろいろな自学自習をしていくような子どもたちにとっても、材料としては良いのではないかと思います。今言ったような視点をいろいろと勘案してみると、相対的に見て教育出版が良いのかなと思いました。実際に手にとって全部通して読んだときに、最初に思ったのは、実は東京書籍とこの二つが良いと思ったんです。なぜ良いと思ったのかというと、巻末がいろいろな振り返り、まとめみたいになっていて非常に見やすい。それから、新出漢字の書き方なんかについても教育出版は非常に見やすく、整理が比較的しっかり行われているという意味で良いという印象を持ちました。そういう点で、相対的に見て一番バランスがとれているのが、教育出版ではないかというふうに思いました、推薦させていただきたいと思います。

○高木委員長 では、私の感想です。今、教育出版を推薦するというお話でしたけれども、私も結論的にはこれで構わないと思います。6年の上の8ページを開けてください。山村暮鳥の詩がありますね。詩で絵を描いているんです。それで、こういうのは先生の力量が問われるのではないかと思います。ただ、おもしろいと感じました。そして、教育出版で一番良いのは、やはり漢字がほかの出版社と比べて抜群にしっかりしている。目次を開けていただきますと、例えば今の6の上でもいいのですが、「漢字の広場」というところにたくさんある。だから、この漢字にアクセントを置いているという印象を非常に感じました。それから、単元の構成が多分問題になるのだと思いますが、これについては光村にしても、あるいはこの教育出版にしても、それほど大差がないという印象です。光村は光村の特殊性を出しているのだと思いますが、私はこっちの教育出版のほうが良いなということ、それから、最後に「言葉のとびら」というのがあって、そこで、いろいろまとめのような形で取り扱っている。これはかなり役に立つのではないかと思います。私も教育出版で構わないと思います。

○久保教育長 一つ忘れていました。もう一つ推薦したい理由の中につけ加えさせていただきたいのは、実は芥川龍之介の作品が教育出版は二つ取り上げられているんです。3年生と6年生に。3年生のほうは俳句で、6年生は「蜘蛛の糸」が取り上げられています。やはり墨田区ゆかりの芥川龍之介が取り上げられているということも、一つの理由です。

○高杉委員 私も結論から言うと教育出版で良いと思います。各学年、上下とも巻末に「ノート・メモ」というところがあります。この「ノート・メモ」というのが、ほかの会社にはあまりなくて、やはりノートをとるとかメモをとるということは、国語だけではなくて各教科、他の教科にも波及するので、非常に影響が大きいと思います。1年からずっとノートのとり方、書き方が開きで懇切丁寧に書いてある。これも一つ教育出版を推薦する大きな要因になりました。

○鈴木委員 私も結論として同じです。私は、逆に幼稚園から小学校に上がったときに、本を聞くというようなところ、読んでもらうというような単元があったと思うのですが、1年の上で、教育出版に出ている本が、非常に言葉がリズムカルなものから、お話のストーリーをきちんと理解するところまで、非常にバラエティーに富んでいて、しかも、段階をしっかりと踏んでいるなというところがあって、この次にこうなっていくというような成長が分かりやすいというようなところがあったので、良いのではないかと思います。

○横井委員 私もいろいろ中身等を見てみました。少しお話しさせていただきますが、まず、総ページ数を言うと、これは区内の調査員の先生方が言っていますが、三省堂が別冊も含めて総ページ1,984ページです。これが突出して多い。その次が教育出版で1,794ページ、それから、東京書籍が1,732ページ、学校図書が1,690ページ、光村出版が1,640ページで、全体としましては三省堂と教育出版が多

いほうになります。国語はやはり資料性という面が大きくて、量が多いほうがいろいろな情報が詰まっているということで、単純に考えればそこが良いと思います。三省堂は別冊というところがユニークですね。使いやすいといえば使いやすいし、場合によってはいちいち両方開かなければいけないということもありますが、工夫は見られると思いました。本区の子どもの実態の話が先ほど久保教育長からお話がありましたけれども、読解力も非常に要請されているところだと思います。読解力、特に物語ではなく説明文をどう読み取るかというふうなことが重要だと思うのですが、例えば三省堂の説明文、4年の36ページに「打ち上げ花火のひみつ」というのがあります。それから、同じ4年で、例えばページ数の多いのが教育出版でしたので、教育出版でいうと、34ページに上巻、「アーチ橋の進歩」とありまして、どちらも打ち上げ花火の仕組み、それから、アーチ橋の仕組みについての説明文ですから比較できると思うのですが、このタイトルを見ていただくと、三省堂のほうは「打ち上げ花火のひみつ」が大きい読み物のタイトルで、その右に、ねらいに当たることが書いてあるのですが、「段落のつながりに気をつけて内容をとらえよう」と書いてあります。教育出版のほうは、この単元が「情報を求めて読む」ということになっているんですね。ねらいは情報を求めて読むことですよ。いわゆる説明文の要点ですからね。その手段として、段落を考え、意識するかもしれないけれども、そうすると、説明文を読むねらいが何なのかということがまず分かるように単元のタイトルとして、教育出版が情報を求めて読むというふうにしてあるのは、非常に意味のあることだなというふうに思います。段落のつながりに気をつけて内容を捉えようというのは、これは場合によっては物語文だって、動きを見たり、場面の変化を見るために段落のつながりに気をつけながら内容を捉える必要がありますので、説明文のねらいとしてはあまり適切ではないのかなというふうに思いました。ですから、今、言った2点を比べてみると、ページ数の多い2社で見ると、教育出版の内容が、そういう意味では適当かなというふうに思います。それから、いろいろあるのですが、今度は1年生初期の入門の話なのですが、最初に平仮名を書く学習について、私は目をつけてみました。そうしましたら、平仮名が最初に読む教材として出てきますけれども、各段階では何を書かせているかということ、多くの会社は、学校図書は「つくし」「かき」「ことり」、東京書籍が「くつ」「つくし」「こい」、教育出版は「くつ」「つくし」「つり」「いし」となっています。これは何かといいますと、要するに1画か2画で書ける簡単な平仮名なんですね。「へそ」なんていうのが出てくるのですが、何でそんなのと思いましたけれども、要するに画数が少ないということのようです。光村は「いちねん」を書くことになっております。「い」は比較的書きやすいですけれども、「ち」や「ね」「ん」はかなり難しい形をとる、難しい字なのでどうかなと思いました。三省堂は「くつ」「へそ」「ことり」なだけけど、その前に「あいうえお」というのも筆順がついて入っておりますから、場合によってはそこから入ってしまうと、「あ」が一番最初に来て、かなり厳しいなというふうに思います。ですから、そういう意味ではスタートに学校図書、東京書籍、教育出版あたりが無難に挙げていると思います。同じく1年で初めての学習する漢字ですけれども、漢字が、これも単純な「一」から「十」とか、「山」や「川」とか出てくるわけですが、巻末の漢字の表というのが、後のほうにあります。それを見ると、1年生の上巻の巻末を見ていただきたいのですが、これが、東京書籍と教育出版の1年上の巻末の漢字の表が私は良いなと思いました。あと、幾つか違いがありまして、一つは字体です。東京書籍は教科書体の活字を使っているのですが、教育出版は手書き風になっているんですね。それから、もう一つは、東京書籍は、読みは書いてある。教育出版は読みが書いてある上に筆順が書いてあります。どの教科書ももちろん習ったときに筆順は教えているのですが、何か確かめようとしたときに、後ろを見れば

出ていると思って見ても、筆順がそこに書いてないと、さかのぼって見ないといけないですね。ですから、そういう意味では二つ視点がありまして、一つは、手書き風のほうが親しみやすいだろうということが一つと、それから、筆順をきちっと書いてあるまとめが良いだろうということ。そうしますと、東京書籍と教育出版です。東京書籍のほうが大きい、教育出版は少し小さいですけども、手書き風の字に漢字があって、筆順が書いてある。もちろん既出の漢字の読みが変わっただけのものには筆順はありませんけれども、新しく出た新出漢字には筆順が書いてあるということで、そういう意味では東京書籍か教育出版が良いと思っております。それから、もう一つ。新たに取り上げられることになった伝統的な言語文化で、私は特に高学年でどのように扱われているかを見てみましたら、これはかなり出版社によって違いがありまして、充実しておりましたのが三省堂、教育出版ですね。それから、比較的軽く扱われているなど思ったのが学校図書と東京書籍です。それぞれ取り上げられている内容を見てみますと、おもしろかったのは、東京書籍の6年の漢文に論語のほかにも17条の憲法の第1条「和をもって尊しとなす」というのが漢文と読み下しで書いてありましておもしろかったです。それから、教育出版では、これは古典になりますけれども、現代文で書いてはありましたが、アイヌの神謡集という、アイヌに伝えられたお話が入ってありました。伝統的な言語文化。それから、沖縄の「おもろそうし」も入ってありまして、資料的にもおもしろいなと思いました。あとは、漢文、漢詩です。漢文は「論語」が多くて、それから、漢詩は「春眠暁を覚えず」が多かったですね。それから、古文では「枕草子」「竹取物語」の冒頭部分が多かったですけれども、三省堂は5年生の教科書に「狂言」が載っておりまして、しびれが切れたって嘘を言う話が全文載っておりまして。別冊のほうに「漢詩」や「平家物語」が載っております。それから、6年では漢文の「論語」が載っておりまして、別冊のほうに「枕草子」や「徒然草」「奥の細道」が載ってありました。教育出版は、5年では漢文が漢詩二編、「論語」「大学」も載ってありました。物語は「竹取物語」「平家物語」があって、ここ先ほどからお話が出ているように巻末が充実しておりまして、巻末に「漢詩」や「論語」「源氏物語」、それから、室町時代の「伊曾保物語」というのが載っておりまして、おもしろかったです。それから、6年では、「枕草子」と「万葉集」などが載ってありました。あと杜子春も載ってありました。杜子春は古文ではないですが。そういうことで、充実しているのが三省堂と教育出版であると思います。今、若者たちの言葉が貧困になっておりますけれども、いくら言葉が生き物であるとはいえ、バックボーンに正しい日本語、本来の日本語を身につけるという意味では、こういった伝統的な言語文化というのは、それとして大切なのではないかと思いますので、適切に導入するという意味で大切に扱っていただきたいなというふうに思っております。というわけで、私もいろいろな観点からそれぞれの良さはありますけれども、教育出版が適切だと思っております。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、国語について採択をいたします。国語は教育出版株式会社を採択することにししたいと思います。ご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○高木委員長 それでは、教育出版株式会社を採択することに決定いたします。それでは、引き続きまして、書写について審議をいたします。指導室長、ご説明をお願いします。

○指導室長 はい。書写の指導事項でございますが、姿勢、用具、筆順に関する事、字形に関する事、点画の書き方、字形の整え方、字の形や大きさ、字配りなどから構成されております。また、書写の指導については、手紙を書いたり、記録をとったりするなどの実際の日常生活や学習活動に役立つ

つよう内容や指導のあり方の改善を図っております。毛筆を使用する書写の指導は、硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、各学年年間30時間程度を配当することとされております。書写の現在使用している教科書は、「光村図書出版株式会社」でございます。全6社からの採択をお願いいたします。

○久保教育長 書写につきましては、結論から言いますと、私は光村を推薦したいと思うのですが、国語と統一したほうが良いのかどうかという点についてはどうなのでしょう。それがもし関係ないというのであれば、私としては光村にしたいと思うのですが、どうでしょうか。

○指導室長 見本本を提供されている各出版社のほうでは、国語の教科書と書写の教科書について、単元構成に合わせた展開ができるようなページ表記をしている出版社も多くございます。しかし、国語の使用する教科書会社と書写の教科書会社が違ったとしても、実際のその指導場面で特に困るということはないかと思われまます。

○久保教育長 書写につきましては、やはり基本的には字の形や運筆の仕方、点画をきちんと押さえていくということがポイントかと思えます。そういう点ではやはり何と言っても、硬筆は普段どおり書けるのですが、毛筆の取扱いが、そういう点画や書き順などについての基礎になると思えます。そういった観点では、やはり毛筆の導入に当たる3年生のところがどのようになっているのかについて私は着目をさせていただきました。その結果、この導入が最も丁寧で、かつ初心者であっても比較的分かりやすいのは光村ではないかなと思いました。例えば3年生のところかというと、最初に、横画から縦画と図が出ていて、切り抜きがありまして、この後で必要なところに張っていきながら、これを覚えていくという形になっているのですが、これはなかなか良いかなと思えます。それと、用具の準備というところから入っていくところでも非常に分かりやすく丁寧ですし、何と言っても、この筆の運びですね。それぞれのところで非常に細かく、一番丁寧に書かれていると思いました。それから、漢字の形の整え方が13ページにあるのですが、ここはクイズ形式になっていまして、なかなかおもしろく、漢字の止めなどの意味合いが見えてくるような形になっています。そういう点では、3年生くらいの子どもが毛筆に初めて取り組むに当たっては、非常に分かりやすい教科書ではないかと思いました。ほかの教科書もいろいろ工夫はしているのですが、やはり一番子どもにとって受け入れやすい形がこれではないかなと私は思います。そういう点では毛筆の導入が一番丁寧でしっかりしていると思いますので、光村を推したいと思えます。

○高木委員長 書写、先ほど冒頭にありましたように国語と密接につながっています。答申案に、教育出版の硬筆教材は文学作品など、国語の教科書から取り上げられているので国語との関連があるとされています。もちろん国語と関連付けると、どこの教科書と関連するという意味ではないのだと思えますけれども、そういう意味では、国語と書写が非常に関連深いのだろうとは思えます。独立して見たときに、あまり実用性を議論してはいけないのかもしれないのですが、日常生活のことがやはりあると思えます。そういう点からは、日常生活での使用に配慮しているのは光村ではないかと思えます。ですので、光村が良いと思えます。

○横井委員 先ほど、光村の国語の教科書で、1年の最初に書くのが「いちねん」で、難しい字だと言ったのですが、書写はどうかなと思って見てみたら、書写の方は最初は「くつ」になっておりました。先ほど言ったように、簡単な点画の毛筆で始まるということですので、そういう点で「やま」は難しいですけれども、最初がこの「くつ」であるという点は良いと思えます。そういう点では光村で問題ないと思えます。

○高杉委員 これは非常に悩みまして、低学年の1・2年ではフェルトペンやチョークの勉強、あと鉛筆書き、また3年から毛筆、そして5・6年で大体硬筆ということになってはいますが、やはり今、久保教育長が言ったように、やはり日本独自のものということで、毛筆に焦点を当てたほうが良いかと考えました。そのときに、各社子どもが実際に書いてみるときに、光村は、下に書き順や筆運びが書いてあります。こういう点について、ほかの会社と比較してみますと、やはり3年生で子どもが初めて筆を持って書き始めようというときに、教科書を開いて一面でいろいろな情報が簡潔にあったほうが私は良いと思いました。そういう点で、私は光村が良いと思いました。いろいろ細かいところで、子どもが書いたり読んだりすることを前提に、非常に気を配っているという印象がありましたので、光村で良いのではないかと私は思いました。

○鈴木委員 私は子どもの目線で最初に鉛筆を持つときのことを少し見ていたのですが、私も結論から言うと、やはり光村が良いと思っています。というのは、子どもが持ったときに後ろから撮っている写真を載せているのが教育出版と光村です。実際問題、鉛筆を最初に持ったときに、指が1本入るとか、そういう具体的に持ち方を指導している。お話との比較をしているところは結構あるのですが、そうではなくて、子どもが実際鉛筆を持ったときに、できているかのチェックができるというところに関しては光村が良いかなと思ったのと、あともう一つは、このペンギンが結構かわいくて、活躍をされていて、折れとか結びとか、とめとかはねとかがすごく分かりやすいなというふうに思いました。ですので、導入という視点から考えると、やはり光村が優れていると私は思いました。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、書写について採択をいたします。書写は光村図書出版株式会社を採択することにしたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○高木委員長 それでは、光村図書出版株式会社を採択することに決定いたします。それでは、引き続きまして、社会について審議をいたします。指導室長、ご説明をお願いします。

○指導室長 はい。それでは社会の目標につきまして、ご説明いたします。社会の教科の目標は、社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う、となっております。学年の目標においては、調べたこと、考えたこと「を表現する」と改められ、調べ学習・言語活動の充実が重視されています。本区の児童自身が「自ら調べ、課題を追究する学習」がいかに実施しやすいかといったことも考慮していただき、ご審議いただきたいと思っております。社会の現在使用している教科書は、「東京書籍株式会社」でございます。日本文教出版株式会社からの2社を含む、計5社からの採択をお願いいたします。

○高木委員長 今お話にあったように、5社からの採択となるのですが、社会科というのは争点になる考え方と、基礎的な事実がしっかり押さえられているかがポイントになるかと思っております。結論から言いますと、教育出版を推したいと思っております。現在、東京書籍を使用しているのですが、東京書籍の利点というのは、単元ごとに、つかむ、調べる、まとめるということが明記されている点ですね。調べ学習に焦点を置いた構成になっています。巻末に作品も用意されていて分かりやすいというメリットがあります。ただし、やり過ぎという感があります。例えば、6年生の上を見ていただくと非常に分かりやすいのですが、84ページから古地図を使って歩いてみようということで、地域の歴史の調べ方が出ています。松本市が対象になっています。古地図と現在の地図とを比較してということです

が、非常に難しいですよ。難しいのに加えて、いろいろ調べ学習ですから、86ページには江戸時代の人々の職業が出ております。この職業のところに台詞を入れるようになっていますが、我々も少しわからない。要するに、さっきやり過ぎと言いましたけれども、例えば72ページに、まず調べるといふのがありますよね。江戸幕府の話があつて、74ページにまた調べるがあつて、76ページ、78ページ、また80ページに調べるといふのがある。調べ学習が身に付くということは事実なのだと思うのですが、少しやり過ぎという感があります。それから、教育出版の場合には、調べ学習は東京書籍ほどないのですが、やはりここも5・6年に索引を設けて調べ学習に役立つような対策をとっています。それから、3・4年の上巻の巻頭で、問題解決型の学習の仕方が説明されているということで、社会科はご存じのように3・4年から始まりますから、最初にそういうことをするというは良いことだと思います。それから、もう一つは、6年の上巻の、例えば119ページに学びの手引きというのがありますが、こういうものを使って調べ学習的なものに代えるといひますか、自分たちで調べたことを整理していくというようなことを考えています。だから、東京書籍のように何度も調べ学習を繰り返すということではなく、それなりの工夫がとられています。それから、光村ですが、光村の場合には前から出ていますように、5・6年がこれ1冊になっています。1冊で厚く、これに対する評価は国語の場合と同じように賛否両論です。要するに、重いというのが欠点ですね。それから、いろいろ遡ったり、あるいは先のことを調べるときに良いという長所もあります。それで、どちらをとるかということですが、社会科の場合もやはり厚いという欠点のほうが目立っているようです。あまり遡って何かするという機会は多分少ないのだらうと思います。それから、索引がこの光村はないんですよ。だから、要するに調べるときに少し面倒だということがあります。それから、日本文教出版、「小学社会」と「小学生の社会」という2冊があります。「小学社会」のほうはキャラクターを使うんですよ。例えば「お茶の水博士」とか「鉄腕アトム」とかが出てきて、それ以外に男の子と女の子が出てきて、キャラクターが活躍するのは良いのですが、「お茶の水博士」の説明が煩わしいなどの指摘がありました。要するに、キャラクターがたくさん出てくるのは親しみを与えるという趣旨でやっているのだと思いますが、うまくいっているかどうかというのは少し分かりません。それから、もう一つ、この会社、西日本の情報が多いですね。この点は次の日本文教出版の「小学生の社会」もそうなのですが、東日本の我々にとってはなじみが薄いという問題があるかもしれません。特に社会科の場合に3・4年、最初入るあたり、私の町とか、みんなの町とか、そういう町を調査します。そのときに教育出版は横浜及び神奈川が例にとられています、それが身近で良いと思います。ですから、最初の3・4年の導入部分で割と近い地域が好まれるという意味では教育出版が良いのかなと思います。それから、いくつか論争になるような点ですね。例えば一つは、領土の話ですね。竹島とか尖閣諸島とかについては、どこもぼかして書いてあります。それから、問題は日露戦争あたりが少し濃淡があるということですね。ただ、問題ないと思うのですが、割と詳しいのが教育出版と東京書籍かもしれませんけれども、そんなに問題あるようには思えません。それから、神話や何かの話ですね。これもほとんど差がないです。それから、もう一つあるのは、自虐史という言葉が流行っていますが、要するに、第二次世界大戦での日本の敗戦、あるいは戦争中、中国、韓国に対してこういうことをやったとか、それを詫びるとか、今でも通じていますが、そういう自虐的な観点、そういうものはあまり各社とも見られません。だから、そういう論争に当たるところの差というのは、そういう意味で少ないということです。あと、墨田区、下町は大空襲のときの拠点になりましたが、その辺の記述がどうかということがあります。これが大空襲でやられたときの墨田区です。これが現在の墨田区という格好で、こうい

うのを対比されていると非常に分かりやすい。教育出版が一番その点鮮明に出てきます。それと、東京書籍では、明治維新の頃の大河ドラマじゃないですが、人間関係図というのがあります。人間関係図は、これは東京書籍のほうが良いです。教育出版ですと、坂本竜馬が前面に出てくるんですね。教育出版は91ページです。それから、東京書籍は112ページです。この二つを対比してもらると、東京書籍は西郷隆盛が前面に出て、こっちのほうがより歴史を感じます。それは東京書籍のほうが良い点だろうと思います。ただ、当然ですが、両方とも勝海舟はちゃんと出てきます。それから、逆に条約改正の話が割とこの頃重要になっているのですが、不平等条約をどうやって改正していくかという、その辺の記述は教育出版が非常によく書いているんですね。教育出版ですと109ページです。6年生の上の109ページ、これですと、要するに大きくとって、しかも、設問方式になっていて非常に良いと思います。東京書籍だと120ページですが、さらっと書いてあるだけで、これだとあまり注目されない。ですから、条約改正のところでは教育出版が良いということです。個別に見るとそれぞれ多少差がありますが、先ほどの墨田区の扱いとか、それから、全体的な調べ学習にしても、あまりマニアックになってはいけないと思うんですね、小学生ですからね。だから、そういう全体的なバランスを考えると、やはり教育出版が良いかと思います。

○横井委員 いろいろ社会科は難しいことがいっぱいあると思うので、昨日、今日、話題になりました日韓併合など、どういうふうに話題になっているか、日本文教出版の小学社会は西に偏り過ぎているので、社会科としてはあまり適当ではないかなと思い、私は考慮の対象に入れませんでした。ですから、残りの四つの教科書について意見を述べたいと思います。光村を見ても、6年生の113ページ、それから日本文教出版が109ページ、東京書籍は119ページ、教育出版は106ページです。それで、今、教育出版の6年の上の106ページを見ても、106ページの下から2行目に、「1910年、日本は朝鮮（大韓帝国）においての強い反対を押し切って朝鮮を併合し、植民地にしました」と書いてありまして、もちろんこれは歴史の事実として正しいですね。その前5行、「ロシアとの講和条約で日本は樺太、サハリンの南半分と南満州の鉄道や鉱山の権利を得ましたが、賠償金は得られなかったために」と書いてありますね。私は、そこが少し問題だと思います。それから、光村もほぼ同じように、114ページ「日露戦争の後、朝鮮半島に対する支配を強めた日本は」と書いてあって、ほぼ同じことが書いてあります。その前を見ていただきたいのですが、113ページに「日露戦争が終わって、アメリカの仲立ちで講和条約を結びました」と書いていますね。これも事実だけれども、私が申し上げたいことは、こうであります。日本文教、109ページの下の方、「翌年、アメリカの仲立ちで講和条約が結ばれ、勝利した日本は樺太、サハリンの南半分とロシアが南満州に持っていた鉄道や鉱山の権利を得ました。大韓帝国の政治を指図することも認めさせたものの、賠償金は得られませんでした」、これは今、前に述べた2社には書いていないです。講和条約の結論は、南満州鉄道とサハリンの問題だけではなくて、大韓帝国をどうするかということアメリカの仲立ちでロシアに認めさせたという国際的な了解があったという事実ですね。それが正しかったかどうかの問題ではなく。ただ、この日本文教出版は、その後に朝鮮を併合したということが書いてあります。ですから、東京書籍も分かりやすく書いてありまして、「講和条約において樺太の南部と満州の鉄道を得て、韓国を日本の政府のもとに置くことをロシアに認めさせました」ということで、良い悪いの問題ではなく、これがないと、その当時の国際的な流れ、事実がどうであったかということが理解できないのではないかなと思います。ポーツマスの講和条約の中身を意図的に抜いてあるのは、どうかなというふうに思います。ですから、そういう意味では東京書籍や光村より文教出版のほうが正確に書かれているなと思い

ます。でも、嘘を書いているわけではないですから、光村や教育出版もありだと思えます。次は別の視点ですけども、東京書籍6年の上で、いろいろ資料があるという東京書籍で、22ページを見ていただきたいです。地図がありまして、鉄剣が2本と日本地図があって、古墳の分布が書いてあるのですが、この地図見ると、大和地方と大阪の大仙古墳、あと稲荷山古墳と江田船山古墳しか書いてないんですね。そうすると、やはり日本の歴史はこの辺が中心で、関東や九州は辺境で、そんな珍しいものしかなかったのかなというふうに見えてしまいます。これ子どもたちが持つ意識としては、かなり重要なことだと思うんですね。それに当たるものが各社ありますけれども、他の3社は、それはきちんと書いてあります。古墳の分布図、例えば教育出版は15ページ、それから、光村は25ページ、文教出版は19ページで、日本各地に点在しておりまして、この稲荷山古墳と江田船山古墳について名前があるのもありますし、それから、それ以外の古墳に名前がついているのもありますが、特に文教出版は、この古墳の集まっているところに毛野、尾張、吉備、出雲、筑紫、日向というふうに書いてあって、日本のその当時、大和朝廷ができるかできないかの頃は、そこだけではなくて地方にも歴史があったということ、各地域を理解する上では非常に重要なことだと思うので、そういう意味ではこの3社、特に日本文教の地図が良いかなというふうに思います。そのほかにもいろいろありますので、それぞれみんな一長一短になるので、何とも言えないと思いますが、先ほど委員長もおっしゃったように、墨田区の資料がいっぱい載っている。特に委員長も指摘されましたけれども、空襲直後の両国と現在の両国が載っているというのは、非常に良いだろうと思います。それから、学年は違うんですけども、3・4年の社会科を見ておりましたら、例えばインタビューをすることがいっぱいあるのですが、インタビューの仕方について、大体1ページ使っていないところが多かったり、コラムみたいに扱っているのですが、教育出版は132ページに「わくわく社会科ガイド」としてインタビューの仕方、電話のかけ方、手紙の送り方など、2ページにわたって非常に詳しく丁寧に書いてありまして、先生たちが子どもにインタビューさせるときに、さあ、行ってきなさいというだけでは済まないわけですけども、そのときも非常に良い手がかりになると思いました。それから、これもご指摘ありましたけれども、学びの手引きのようなコラムだとか、学習のまとめ風のコラムが各社それぞれありますけれども、全体として学び方の手引きという欄が詳しく充実していますので、全く問題がないというわけではないけれども、教育出版でも良いのではないかと思います。

○久保教育長 私は大体、日本文教は、どうしても西日本中心なので、やはりできれば関東のなじみの深いことが書かれているほうが良いかなというふうに思います。そういう点では、東京書籍と光村ぐらいかなと思うのですが、先ほどお話もありましたように、いろいろな意味で墨田区になじみのあるものがあるわけですが、実はもう一つ、3・4年の下の20ページ、21ページに地域安全マップというのがあります。ほかにもいろいろ地図をつくらうとか、マップをつくらうとかあるのですが、実は5年生でこの地域安全マップづくりというのを教科の中で必ず取り入れているのですが、最も親和性の高いマップづくりについて、場所に着目した危険性についての配慮が認識を深めていきますので、ぴったりここに合って、大変気に入りました。これが教育出版です。それから、墨田にかかる記述がやはりそのほかにも結構多いですよ。そういう点にも大変親しみを感じられますので、その分を含めて、是非教育出版が良いのではないのかというふうに私も思います。

○高杉委員 私も教育出版で良いと思いますが、皆さんが指摘されたことと重複になってしまいますが、調べ学習ですね。調べ学習が、東京書籍が80何%、調べよう、調べようで、非常に調べ学習というのは児童が調べて疑問がわいてきて、学習を発展させるという非常にすばらしい効果があるのですが、

80何%も調べる、調べるでは、少し多過ぎるだろうと思います。そんな視点で考えますと、教育出版の学びの手引きですとか、そんなところが児童にとっては調べ学習が適度に勉強できる内容かなと思いました。そこだけ重ねて意見を述べておきます。

○鈴木委員 私は二つの視点から、やはり教育出版が良いと思いました。一つは、ユニバーサルデザインをとっているということと、もう一つは、例えば私たちの願いと政治の働きみたいな、政治のところに入って行くのに当たって、教育出版が放課後というところからスタートするんです。教育出版の6の下の4ページで、ほかは高齢者の視点、もちろんすごく大事です。特に今、問題になっていますし、大事なのですが、非常に子どもの身近な生活からきているというところと、インタビューのところで、これはほかの教科書では割とイラストが多いのですが、実在の人物の方が出ていって、例えば教育出版の区役所のところとかも、是非今度は墨田区になってほしいなと私は思いますが、こういうふうにも子どもにとって一番身近な問題からスタートしていくのが良いと思います。東京書籍は、やはりものすごく自主学習が進んだ子には良いだろうとは思いますが、どんな活動、どんな働きをしているのでしょうかというようなことがあって、これは難しいなと思ったのは、6年生の下の東京書籍ですが、市役所で取材をするときに、担当の部署を探るところから始まるんですね。6年生で詳しくたたらすごいなというふうに思いました。だから、自主学習がすごくできている子には良いだろうとは思いますが、現状を考えますと、やはり教育出版の、今の自分の位置から踏み出すというところが私は良いなというふうに思っております。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、社会について採択をいたします。社会は教育出版株式会社を採択することにしたと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○高木委員長 それでは教育出版株式会社を採択することに決定いたします。それでは引き続きまして地図について審議をいたします。

○指導室長 はい。それでは、地図についてご説明いたします。地図に関わる目標の改善につきましては、児童が社会生活や我が国の国土に対する理解と自然災害の防止の重要性についての関心を深めることができるようにすること。基礎的・基本的な知識、技能を活用し、学習問題を追究・解決することができるようにするために、各学年の実態に応じて地図などの基礎的資料を活用したり、社会的現象の意味や働きなどについて考え、表現したりする力を育てること、とあります。特に、教科用図書としての地図の活用について、社会科の学習を進める上で大切な教科用図書であることや、他教科や日常の指導においても指導を行い、地図帳を自在に活用できるようにすることが望まれております。本区の児童が進んで調べ学習に取り組んだり、日常の生活においても活用が図られたりするような点についても考慮していただき、ご審議いただければと考えます。地図の現在使用している教科書は、「株式会社帝国書院」でございます。全2社からの採択をお願いいたします。

○高木委員長 2社からの採択ということで、今、使っているのがこの帝国書院のほうです。帝国書院と東京書籍では、全体の構成がまず違うということです。帝国書院ですと、最初に都道府県があるわけです。都道府県があって、その後に地図の約束とか目次とか、そういう一般的な話がきて、それから、本格的に出てくるのが13ページからです。それで、13ページ、14ページあたり、もう少しそうですね、18ページまでが良いでしょうか。日本全体の外観がまず出てきます。日本全体ですね。それから、こっちに日本の大きな地図が出てくるということで、まず外観が出てくる。それで、これ多分売

りのつもりなのでしょうけれども、帝国書院では4ページに宇宙から眺めた日本列島ということで、まず日本列島全体を押さえています。それからあとに、ブロック別に九州とか、あるいは九州に対して今度は特定のもっと身近な地域ですね。例えば福岡とか、それから、今度は中国地方、それから、四国地方とか、焦点になりそうな地域という格好で列島全体、それからブロック、それからブロックに付随して注目すべき地域という構成になっています。ところが、東京書籍はなぜこういうふうにしたのかよく分からないのですが、最初、東京が出てくるんです。それで、その後、これ列島と言えれば列島なのですが、帝国書院でいう都道府県に相当するのが出てきます。そして、列島に相当するのが出てくる。日本とその周りの国と地域という世界に入っていないと列島が出てこないんです、東京書籍は。後から出てくれば良いのではという考え方もありますが、要するに、そういう構成が後ろに来てしまっている。それからもう一つ、東京書籍は大きいブロックが出てくるんですね。これ何のためにやったのかよく分からないのですが、大きなブロックが出てきます。次に細かい地域が出てきます。要するに、9ページから14ページまでの地図というのが何となく重複している。どこかで多分、差別化したかったのだと思いますが、これはどうもあまりうまくいっていない。あっても構わないのですが、何のためにやるのかというのがよく分からない。それで、16ページ以降、やはり沖縄から始まって、17ページが鹿児島、宮崎というような感じで、以下、どちらかというところか三つの県をベースにしたようなものが出てきます。それで、重要なところは、例えば26ページが大阪ですが、大阪、奈良、京都ですか、そういうところに重点を置いたような図が出てくるという構成になっています。だから、東京書籍と帝国書院では、そういう意味で全体の構成が違う。全体の構成の違いだけ言っても仕方がないので、どちらが良いかというと、やはり最初に列島がきたほうが素直かなという印象は持っています。それからもう一つ、帝国書院の利点というのは、この会社は技術を持っているのでしょよね。例えば世界を見ますと、日本が出ている地域以外、例えばヨーロッパ、57ページ、58ページですね。そうすると、日本列島全体が出ているんですね、こういう形で。それで、ご存じのように地図というのは地球儀があるように、本当は球体なわけですよ。それを平面図に写すとき、どんな手法を使っても何か誤差が出てくるのは当たり前ですね。そうすると、その誤差をいかに埋めるかというのが一つの工夫になって、そういう配慮は帝国書院にはあるということが分かるかと思います。特にこういう世界関係については、例えば60ページもそうですよね。ここがスカンジナビア半島ですが、日本全体の地図を示し、どのくらいの大きさかというのが分かる。できることを全部やろうということで、48ページに北海道がありますが、択捉島と沖縄島がどのくらいの関係にあるかということで、こういう比較ができるような配慮をしているというのが長所だと思います。では、東京書籍のほうはというと、例えば40ページに仙台湾があります。石巻港の主な水揚げとか、そういうようなものが出ています。一方、帝国書院だと46ページですが、帝国書院はそっけないです。それに対して、一方は何が採れるかとか、そういう情報が付いていて、これは東京書籍のほうが良いと思います。そういう微妙な差があります。どちらをとるかというのは少し難しいですが、要するに帝国書院は地図が念頭に置かれていて、東京書籍は情報をできるだけ地図に盛り込もうという視点で、どちらが良いかというと、小学生にとっては東京書籍のほうが良いのかもしれない。プロ的には多分帝国書院が良いのだらうと思いますが。それから、問題は、身近な調べものとかで地図を使うときに、東京がどう書かれているかというのが一つの大きな焦点になります。帝国書院の場合は、36ページが関東地方、それで37、38ページが首都圏、それで39、40ページが東京となっています。東京の現在と、右側が幕末ですね、1856年頃です。それからあと、この大開きで41ページから43ページまで、現在の東京と

ということで、非常に東京に関する情報が多いです。一方、東京書籍はなぜ最初に持ってきたのかどうかは分かりませんが、扉のところに東京がきている。あとは東京が出てくるのは首都圏を各県ごとに扱っている33ページ、ここが埼玉、神奈川、それから、37ページが千葉ということで首都圏を扱っています。それから、東京そのものについては35ページで扱っています。だから、帝国書院のほうが集中的に出ているので多いという印象があります。それで、問題はいくつかあります。帝国書院と東京書籍の両方で欠けているのがあります。社会科は変化しますから、それはスカイアクセスが7月17日、日本医大から成田空港まで入りました。それで、それに対してどう対応するかという問題があります。指導室の方に問い合わせてもらいました。そしたら、2社とも対応しますという話でした。それから、2番目に、帝国書院の40ページ開けていただきたいと思います。左側は現在の地図ですね。右側が帝国書院の1856年頃ですので、嘉永か安政か、要するに幕末頃の地図なので、これ自身が非常に役に立つと思います。だから、そういう意味で帝国書院は入れたのだと思います。それで、こうやって見ると五街道が出ている。奥州、日光、中山道、それから、甲州街道、東海道というふうに出ていますが、甲州街道を見てください。半蔵門のところで止まっています。五街道というのは、もともと日本橋を起点にして整備した街道筋なんです。これも何故かと尋ねてもらいました。そうしたら、ある辞書によると、ここで止まっていたということでしたが、それはないと思います。それで、もう一つ日光街道ですが、日光街道は、これですと中央通りを、上野を抜けて千住へ抜けていくというルートですけれども、当時の日光街道というのは、小伝馬町から浅草橋を抜けて、花川戸を抜けて、箕輪を抜けて、それで千住へ行くわけです。それについて何にも書いてない。これについて、こちらで確認してみました。ここに東京府資料というのがあります。東京府資料というのは、明治5年に当時の陸軍省が各府県に地図並びに地史を作れと命令して、東京府が作った資料です。それで、この道路を見ますと、まず奥州街道ですが、本町三丁目から中山道より右折して、そして浅草橋を経て、それで浅草茶屋町、これは多分、花川戸を指すのだと思いますが、これに抜けると。そして、それから山谷を経て、千住南組大橋を経て中組、北組へ通じるというふうになっているんです。ですから、浅草橋経由。いや、1850年代だと、上野経由の通りも通ったかもしれないのですが、もしそうなら両方書くべきですよ。それから、もう一つ、甲州街道ですが、甲州街道は日本橋の通一丁目、通一丁目の間にて東海道より西折れし、呉服橋ですね。今の八重洲一丁目あたりになるのかな。呉服橋を経て旧日比谷門に至りて、それから、麴町隼町。麴町隼町というのは、ここでいう半蔵門です。要するに、国立劇場があるところです。「一番地に至りて」云々ということなので、帝国書院のお話ですと、ある辞書だと、ここで止まっていたりするというのは、東京府資料も止めていないわけですから、やはりこれもまずいと思います。それから、帝国書院でもう一つ気になるのが、向島百花園が出てこないんです。その39ページから43ページまで地図がありますよね。向島百花園がどこにも出てこないんです。では、そんなに格下かという、文化財保護法という法律があります。その法律で庭園の部というのがあります。一番ランクが上なのは国の特別名勝・特別史跡です。次に、国指定の名勝・国指定の史跡というのが2番目です。その次に都道府県指定になって、次に市区町村指定となります。それで、国指定の特別の名勝・特別の史跡と、二重の特別になっているのは全国で七つあります。それが載っていなかったら当然だめだと思いますけれども、さすがそれはここでも載っている。ところが、向島百花園というのは国指定の名勝・国指定の史跡なんです。だから、第2ランクなわけですね。でも、これ見ると、例えば清澄庭園、これは都指定の名勝です。それが載っています。でも、向島百花園は載っていない。この理由を指導室の方を通して帝国書院に聞いてみました。そしたら、ここへ載せているのは面積を

考慮したということで、私の視点とだいぶズレがあるようです。私はやはり重要性で載せるべきだと思います。面積についていえば、東京23区内で都立公園がいくつかあります。約40あって、それ以外に庭園が八つありますから、全部で50前後あると思います。そして、一番大きいのが水元公園で86ヘクタールぐらいだと思います。それで、あの公園はあの公園で生態系の観点から割と重要なのですが、それから、一番小さいのが向島百花園、約1.1ヘクタールです。もう一つついでに言えば、横網町公園というのがありますが、向島百花園と同様に小さく、約2.0ヘクタールくらいです。だから、帝国書院の基準だと永遠に載らない。でも、私は広さよりやはり行楽地図を作ったりするのと違って、やはりバックに学術的なものがなければ教材としての地図にはならないと思っていますので、この本は使えないと、その時点で思いました。東京書籍のほうを見ますと、36ページにちゃんと向島百花園が載っています。もちろん清澄庭園も載っています。それから、もう一つ、水戸街道へ行くと四ツ木橋があります。四ツ木橋が二つ架かっていますよね。これは東京書籍は合っています。四ツ木橋と新四ツ木と2本架かっている。ところが、こっちの帝国書院を見てください。水戸街道で四ツ木橋が1本しかない。これも問い合わせてもらいました。そうしたら、同じようなところに2本あるときには1本にするというのが帝国書院の考え方のようです。随分私と感覚が違うということです。また、東京書籍の良い点は、35、36ページに23区で有名なもの、盛んなことというのが文字であり、そして、35ページの左のところにその絵がある。これはいろいろな審議会等で好評でした。東京書籍は情報が多いとはいえないけれど、こういう配慮がされている。そういうわけで、教育上間違っている部分について、帝国書院は検討中という答えだったのですが、検討中では仕方がないので、今ある地図で考えると、これは東京書籍が良いというのが私の考えです。

○鈴木委員 私もその文化的な背景もさることながら、私は、東京都の地図を見たときに、帝国書院の41ページ、42ページを見ますと、多摩のほうはこんなに山だったかなと思いました。東京書籍のほうはちゃんとなだらかな感じで出ていたので、そういう意味では東京書籍のほうが現実に近いかなということが一つと、もう一つは、縮図の書き方ですが、両方、地図上の1センチは実際には1キロの距離を表していますというのは書いてあるのですが、東京書籍のほうがこのセンチの目盛りがきちんと書いてあって、小学生には分かりやすいかなというふうに思いました。私も東京書籍が良いのではないかと思います。

○高杉委員 非常に悩むところですが、まず委員長も言われたように、東京書籍のほうはやはりイラストとか、そういうものが非常に多くて分かりやすいというか、親しみやすい、小学生については親しみやすさというのが大きなポイントになると思います。その一方、帝国書院のほうは我々が昔からイメージしている地図という地図がたくさん載っているので、帝国書院のほうがなじみはあるという感じがします。それと、やはり子どもに日本全体を見せる、日本地図を見せたいというのが最初にあると思うのですが、東京書籍のほうは200万分の1で片ページだけです。帝国書院の方は折り込みで16、17、18ページに100万分の1で出ていて、非常にこれは良いなと思いました。そこで、また悩むのは評価なのですが、これは、この地図帳は誰が使うのかという観点から見ますと、我々が地図帳を見るのなら、やはり帝国書院がなじみもあるし、良いのかなという印象はあるのですが、東京書籍の12ページの右側にお国自慢とか、こういうイラストがあって、授業を進めるときに非常に便利かなというところがありまして、また、東京書籍のほうは、色使いが優しい気がします。やはり、小学生が使う地図としてはこちらも良いのかなというところがありまして、非常に悩みました。悩みましたが、やはり大人が見るのではなくて小学生が見るということで、東京書籍が良いのではないかと思います。

○**横井委員** 私は展開、順番、縮尺についてはかなり好みの問題もあると思うので、どちらでも良いかなと思います。やはり地図は見なければいけない。見た目が重要だと思うのですが、これ紙質のせいかな、帝国書院のほうは光るんですね。東京書籍のほうが見やすい。それから、等高線と段彩、その段ごとに、高さごとに色を変えておりますけれども、その等高線が比較的分かりやすいのは東京書籍のほうだと思います。等高線、地図を見慣れてきたら等高線で高さが分かるようにしたいので、等高線が見やすいほうが良いという点でも東京書籍です。それから、光らないということと、それから、色のはっきりし過ぎない、私は色遣いは前から東京書籍のほうが良いとずっと感じておりましたので、いろいろ問題はもちろんありますけれども、そういう技術的な問題からすれば、東京書籍のほうが私は良いと思います。

○**久保教育長** 色使いとか、そういうところはまさにそう思いますし、実は何県を見ようというときには東京書籍のほうが見やすいですね。確かに日本全体を見ようというときは少し見にくいです。そういう点では捉えにくいところがあるのですが、各県を見ようとか、各地域を見るときには、こちらのほうが実際見やすいということと、それから、どのページでもいいのですが、比較して見たときに、例えば17ページで鹿児島県、ここに桜島の絵が載っています。これと桜島の地図のところを比較すると、何となく風景が見えてくる。これは同じのが全部あります。この絵が何となく風景的なイメージ、やや立体感をもって捉えたときの感覚が、比較的うまく子どもが入っていきけるのではないかと思わせるところがありまして、そういう点では地図の平面的なものから立体的なものを理解するには、なかなか良い工夫ではないのかなというふうに思っていました。これはなかなかおもしろいなと思いました。ただ、欠点はあるような気がします。情報量は、東京書籍よりも帝国書院のほうが多いと思います。ただ、子どもが全部の情報を全部読み取るのは無理なわけで、むしろ分かりやすい提示がしてあるという意味では、こちらのほうが子どもにとってはとっつきが良いのではないかなというふうな気がして、そういう点では東京書籍で構わない、むしろやさしくて入りやすいのではないかなというふうに思います。

○**横井委員** 特に見開きのところが、全国が良いか、東京都が良いかなのですが、これは小学校しか使わないわけですね。だとすると、導入のときに身近な東京都の地図が最初にあるというのは、地図の見方を話したりするときにも非常に使いやすいと思います。ですから、積極的に東京書籍で良いのではないかと思います。

○**高木委員長** それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、地図について採択をいたします。地図は東京書籍株式会社を採択することにしたと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○**高木委員長** それでは、東京書籍株式会社を採択することに決定いたします。ここで休憩を取りたいと思います。

(休 憩)

○**高木委員長** それでは再開いたします。引き続きまして、算数について審議をいたします。指導室長、ご説明をお願いします。

○**指導室長** はい。それでは、算数の教科の目標についてご説明いたします。算数の教科の目標は、算数的活動を通して、数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち、筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数

理的な処理のよさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる、となっております。数量や図形に関する基礎的・基本的な知識・技能は、生活や学習の基盤となるものであり、系統性を重視しつつ段階に応じた反復による定着を図るとともに、算数的活動を生かした指導の一層の充実、言語活動や体験活動を重視した指導が望まれております。本区の児童が基礎を確実に身に付け、算数的活動を通して思考力・判断力・表現力を身に付けることができるような教科書が望まれます。算数の現在使用している教科書は「東京書籍株式会社」でございます。全6社からの採択をお願いいたします。

○高杉委員 この教科書全部を見ますと日本文教出版だけが横幅が広い。大体小学生、ランドセルの中に入れて持って行くわけですが、ほかの教科も横幅が広いものが何冊かありますので、広いから良いとか悪いとかというのは頭から外して、まず考えようかと思えます。まず今、話に出ました日本文教出版ですが、これは中身を見ますと横幅が広いために、中にこういう帯が施されております。その中にいろいろなコメントが書かれています。見てもらえると分かると思うのですが、少しゆったりした感じになると思えます。それで、内容を見ますと、「もう一度考えよう」ですとか、「ためしてみよう」というものがあって、子どもたちがいろいろ何度でも考えることができるようになっておりまして、そして單元ごとに「いち・に・算活」というページがありまして、生活の中で実際に体験する算数的な考え方が身に付くように意図されているように感じます。どこの單元にもあるので、見てもらえば分かると思えます。そして、学校図書は、最初の目次で系統的に見やすく表されているのですが、児童が見て本当に効果があるのかどうか分かりません。それと内容を見てみますと、單元ごとにこれも「練習」とか「力だめし」があって、復習等、発展的な学習につなげられるようになってきていると思えます。ただ、その復習と発展へのつながりが少し弱いような気がしました。東京書籍なのですが、2年の下の45ページに「算数マイノートをつくらう」という項目があります。ノートのとり方が書いてあるのですが、ノートをとることの大切さを、その2年の後半で、授業で分からせるというのはとても重要なことだなと思いました。それと、大日本図書ですが、3年の上の最初の見開きで「ノートの達人になろう」がありますが、これは見開きで、こちらのほうがノートに対する大切さを分からせるのにはとても良いページだと思いました。やはり算数だけではなくて、先ほどの国語もそうですが、ノートをとることの大切さというのを子どもたちに教えることは本当に大事なことだと思っております。そして最後に、啓林館ですが、啓林館は「算数のまど」というページがありまして、児童の発展、学習の意欲に応えようとしています。これは内容を見ても、なかなか難しいところがあって、非常に児童の中でも、まじめに頑張っている子どもにはとても良い教科書だという気がします。ただ、全体に見て、この全部の中では多少難しいかなという感じがいたします。これが大体各社の特徴だと思えます。そこで、墨田区ではどうなのかということを考えてみますと、教育研究所の報告では、墨田の児童は算数的活動が弱いという傾向にあるという報告が来ています。そうしますと、表と計算ですとか量と測定、図形、数量関係、その辺がこの教科書、各社どの程度載っているかを比較した報告があります。そこに注目した場合、数と計算では、大日本と教育出版が11か所、東京書籍と文教出版が10か所あります。量と測定では、文教出版が20か所、大日本が17か所、図形では、文教出版が20か所、学校図書が17か所、数量関係では、文教出版が7か所、教育出版が6か所という結果になっております。そういうことで算数的活動においては、文教出版がかなり充実したページ数をとっているということが分かります。そして、算数は、例題を解いて深めて、練習問題を解いて確実にするということが基本だと思います。小学生の場合、特にどこかでつまずくと次に進めなくなるので、各社い

ろいろと工夫はされています。その中でも紙面がゆったりしていて、算数的な考え方が身に付くように意図されているように思われるので、墨田区の児童においては、この日本文教出版の教科書が良いと思います。

○横井委員 単元を展開するに当たって、どういうふうに導入されているかということが大事だと思うのですが、一つの単元について、例えば今、手元にあります啓林館でいいますと、単元が始まる前のページに「準備運動」というのがありますよね。こういうようなことをやって、次に発展していくという見通しが持てるという意味で、そういうのがあるとスムーズに次の勉強に進めるかなと思います。そうすると、今お話に出た文教出版は「次の学習のために」というところで1ページとっているんですよ。東京書籍や大日本もそういった「準備運動」とか「次の学習のために」みたいなタイトルはついていないんだけど、何かそれに当たるような導入ページがあります。ですから、そういったものがあると良いかなと思います。そういう意味では文教出版、東京書籍、大日本、それから啓林館は2分の1ページですけどね。下の半分だけ。学校図書は一部にあると、それから、教育出版も一部にあります、きちっと書かれているのが、今、言ったように文教出版と東京書籍、大日本、啓林館ですね。それから、まとめやコラムがどうなっているか見てみたら、それぞれ各社非常に工夫してありまして、その復習問題がやさしい問題と難しい問題とか、それから、読み物資料でより深めるとか、いろいろなことがそれぞれの会社なりに工夫されておりまして、子どもたちにとっては深められるなというふうに思いました。社によっては、あまり整理されていないようなところもありましたけれども、おおむね良好であります。文教出版は、先ほども話に出ておりました、「いち・に・算活」とか、「なるほど算数」とか「確かめポイント」とか、いろいろな方法、コラムみたいなものがあって、変化を持たせているなと感じました。それから、6年の下巻の最後、ここの内容は微妙でありますけれども、「まとめランドの探検」というのがあって、3コースに分かれていて、選択をしながら算数を深め、広げようという学習が入っていたりしますけれども、これが漫画仕立てでとつきやすいだろうということが一つ考えられます。これは他社もいろいろ工夫しておりまして、東京書籍の6年の下巻は「算数卒業旅行」というのがある。これも充実しておもしろいと思いました。「ミステリーコース」、「国際コース」でいろいろな式の計算の仕方や数、「和算コース」というのがあって、東京書籍の下巻71ページですけども、和算の問題もあります。そういった点で、これも工夫しております。その後また復習問題もあります。それから、同じようにみんなほかも工夫しておりまして、学校図書では別巻になっているんですね。下巻の別巻、学校図書は「中学校へのかけ橋」という薄い冊子がありまして、これは44ページありまして、非常に充実しております。学校図書は上下、本冊のほうでも上下各巻の「算数アドベンチャー」なんていうのがあって、深められるようになっております。他社もそれぞれみんな工夫して一長一短ありますから、評価が非常に難しい。高杉委員がご推薦になった日本文教出版ももちろん良いと思います。いくつか単元を見て考えたのですが、例えば6年生で「円の面積を求めよ」という単元があるのですが、これが結構各社特徴があつておもしろかったのを比較してみました。6年生を見ていただきたいのですが、大きく分けると、直ちに1センチの方眼が何個入っているかという数を数える方式と、それから、外接円、外側の正方形よりも小さい、それから、内接する正方形の面積よりは大きい。だから、2倍と4倍の間で3倍ぐらいだろうというような見当をつけるという操作をやるのと、大きく二つに分かれます。その内接円と外接円の間に入るというのが、私は数学史的に見て正しいというか、子どもたちの考えから見ても自然かなと思うので、そういう意味ではそれは啓林館と大日本と東京書籍と日本文教出版なんですね。ただちに方

眼を数えるという手作業方式は学校図書と教育出版です。教育出版はわきのほうに小さく外接円があって、それも手がかりにするようなことも書いてありましたが、メインは方眼を数えるようになっているわけですね。どちらが良いとも言えないのですが、先ほど言ったように、とりあえずは半径10cmですと直径20cmですから、面積は400cm²よりも小さい、それから、200cm²よりも大きいというふうになって、300cm²ぐらいだろうという見当をつけるほうが、それからどうやって考えていくかというふうに深めていくのが良いと思いますので、啓林館か大日本か東京書籍か日本文教出版になります。啓林館は見本の円が小さいのと、それから、半径が11cmの円も使って考えるというふうなことが少し煩雑かなと思いますけれども、啓林館の下巻の4ページと5ページですね。半径10センチの円の面積を4分の1の円で考えようということで、それは良いのですが、左は10cm、右は11cmなんですね。どちらも正方形の面積のどれだけになるかということを経験していくと、その辺が分かる子どもは分かるけれども、少し複雑になり過ぎてしまう。ほかの大日本、東書、日文はそうしないで、11cmなんていうのは入れない。だから、うんと深めるためには、啓林館は有効だけれども、そうではないと何か混乱させてしまうもとなりそうな気がするということ。大日本は導入が丁寧で、その後の展開も丁寧で良いと、私は大日本、この円の面積については良いかなと思います。東京書籍と日本文教出版はあっさりしているんですね。あっさりしている良さはあるので、そういうふうな方向でもいいかなというふうに思います。東京書籍は上巻の6ページと7ページですね。それから、日本文教出版が上巻の74ページ、どちらも展開としては同じなのですが、日本文教出版のほうが大きいということと、それから、実物大、その1cmが正確に1cmの図形を使っているの、升目を数えるほうが良いのですが、三角形に分解したときに、この底辺の長ささと高さを実測して計算するというようになっておりますね。これが自然だろうと思って、これは東京書籍です。日本文教出版は少し手抜きをしまして、原寸ではない上に、この24分の1の扇型に当たる部分を底辺はこの円周の24分の1になるだろうという想定で計算してしまっているんですね。高さも、もし三角形の面積ならば高さは少し短くなるわけですがけれども、半径とみなしているようです。ですから、それは少し不親切です。これからこうみなしていくという、結局もう皆さんもご存じのようにこういうふうに扇型を細かくして、たくさん並べて平行四辺形から長方形とみなして計算するわけですがけれども、このときにそれが半径になるという意味では、日文はやや手抜きなのですが、それもありがた、あんまり複雑にし過ぎて、手順よくやっていっても煩雑になり過ぎるから、いいかなという気もします。全体にそういったことを除けば、あとの展開は発展の問題もそれほど難しいものはないし、それから、時々教科書では話題になります、相撲の土俵の話がその後に載っていて、土俵の面積が約16m²だということで、子どもたちには身近かもしれません。そういったことで、日文でよろしいのではないかと思います。あともう一つ、これは前の教科書でも話題になっておりましたように、関西系の会社ですから、出てくる資料が関西系だろうと思ひまして、念のためにチェックをしてみましたら、これは社会科とは違いますから構わないのですが、6年上、14ページに図形のところに自治体のマークが載っているのですが、八つあるうち神奈川が入って、あとは大阪、奈良、草津ってある。滋賀の草津市ですね。堺、尼崎、福山、大分ということで、8分の7が関西以西ですね。それから、71ページに琵琶湖が載っております。これは良いと思うんですね、日本で一番大きい琵琶湖ですから。あまり偏ってはいけないと思ひまして、念のために全部チェックしてみましたら、やはり出てくる事例はほとんどが関西系でありますけれども、高学年の場合は、もう地理的なことを勉強しますから、例えば草津なんて群馬県かと思つたら違うところにもあるねというふうに、地図で調べる手がかりになるかもしれない。だから、広げる上で

役に立つというふうにも考えることもできると思います。あとは、各上下巻ほとんど一つか二つぐらいしかありませんし、大阪市と横浜市を比べようということでしたら、それはそれで良いと思いますね、比べるんですから。だから、それはあまり偏ってないということが分かりました。本質的なことではありませんけれども、そういったことがちらっと気になったけれども、あまり問題なさそうだというふうなことになりましたので、日文もありかなと思います。

○久保教育長 算数は、傾向的に見ると啓林館が一番きまじめな感じの教科書だなという印象がありました。一番昔のイメージで、きちっといろいろなものを記されて、内容的にも充実させているというふうに思うのですが、表現が難しい。その対極に多分この日本文教出版はあるのかなと思います。非常にとっつきがよくて、やさしく書かれていて、いろいろなヒントも書かれて、多分やりやすい教科書ではないかなという気がいたしました。その中にあといろいろな形で分類される教科書が入っているのかなと思います。先ほど墨田区の小学生という話がありました。小学校算数の先ほどおっしゃられた部分でもう一つあったのが、実は小学校算数授業改善のポイントという中で、式を読んだり、式に表したりする指導を具体的な場面等で丁寧に扱っていくことは大切であるとしてあって、一から組み立てていくようなところを、作業的な意味合いをやはり重要視しようということのもう一つの意味なのですが、こちらを見ると、必ず式はどういう式になるのか書かせるというのがあるんですね。だから、こちらのほうが非常に易しい分、どういうふうになるかという誘導はこちらのほうがしっかりできているかなというふうに思います。やはり難しい本だと、当たり前式を考えなければいけない状態から始まって、どんどん突き進んでいくという形になっていますので、そういう意味では作業的な要素を高め、式から始めていくというふうなところについて、より丁寧になっている文教出版も一つの方向かなというふうに私も思います。そういう点では、教えやすいという意味では、日本文教出版のほうが望ましいなというふうに私も思います。

○鈴木委員 私も全冊読ませていただいて、やはり啓林館は算数だなという感じはすごくするんですね。実は、3年生、4年生ぐらいになって、急に図形などが出てきて、コンパスの使い方に少し注目してみたのですが、まず、大日本図書がコンパスを使うと便利です。5センチの円を描きましょう。大日本図書の3年生の上の98ページ、半径の長さに関心。中心を決めて針を刺す。もう、いかにもという感じで、東京書籍は、42ページですが、円を描くにはコンパスを使うと便利です、だけ。そういうところがあります。でも、東京書籍は下にちゃんと写真で書いています。啓林館が3年上の33ページですが、半径と言わないで、まず最初にコンパスを開く。針を刺す。一回りさせるという、少し我が身を振り返ってみると、コンパス最初に持ったときに、とにかく何かやってみたかったなというのがあって、そういう意味での、算数は面白いというメッセージというのがすごく伝わってくるような気がします。同じ38ページに、こういう図形を描きましょうという、とてもかわいいんですけども、これ描くまでにどのぐらいの時間がかかるだろうかというような、実際問題かかる手間が、これがさらさら描けてしまう子だと良いのですが、今の本区の現状においてはきついかなというふうに思います。日本文教出版が、これまたとてもかわらしく子どもの手で描いているものを表して、3年上の22ページですが、23ページに球が入ってくるんですが、円柱を探して、正確なものから探して、そしてコマをつくるというようなところで、具体的に手作業をするというようなところを重視しているところは良いかなと思いました。本当はしっかりと勉強してほしいという願いを持ちつつ、今、学んでいる子どもたちのことを考えると、日本文教出版が良いかなというふうに思いました。

○高木委員長 一番算数的なのは確かに啓林館なのですが、啓林館は難しいという、要するに量が多い

ですから、そうすると、できる子には良いのだけれど、できない子は少し苦勞するという面があると、なかなか推せないという面があると思います。ただ、啓林館が少し魅力的だなと思うのは、練習問題が多いんですね。だから、ほかの出版社ももう少し練習問題増やすとか、そういうのがあれば良いなど思っています。日本文教出版も分量は平均的なんですね。大体平均より少し少ないかなという感じでしょうかね。でも、極端に少ないわけでもないし、日本文教出版でも良いと思います。ただ、練習問題、やはりもう少し多いとありがたいですね。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、算数について採択をいたします。算数は日本文教出版株式会社を採択することにしたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○高木委員長 それでは、日本文教出版株式会社を採択することに決定いたします。それでは、引き続きまして、理科について審議をいたします。指導室長、ご説明をお願いします。

○指導室長 はい。それでは理科の教科の目標についてご説明いたします。理科の教科の目標は、自然に親しみ、見通しを持って観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養う、となっております。理科については、課題を踏まえ、子どもたちが知的好奇心や探究心をもって自然に親しみ、目的意識をもった観察・実験を行うことにより、科学的に調べる能力や態度を育てるとともに、科学的な認識の定着を図り、科学的な見方や考え方を養うことができるよう改善が望まれております。また、身近な自然について、児童自ら問題を見出し、見通しを持った観察・実験などを通して問題解決の能力を育てるとともに、学習内容を実生活と関連付けて実感を伴った理解を図り、自然環境や生命を尊重する態度を養うことが重視されております。理科で現在使用されている教科書は、「大日本図書株式会社」でございます。全5社からの採択をお願いいたします。

○横井委員 総ページ数は、区の調査によりますと、教育出版が697ページ、大日本が644ページ、啓林館が628ページ、学校図書が621ページ、東京書籍622ページで、教育出版が多いですね。ただ、大日本644ページで多い上に、これは判が他社に比べて大きいのですが、情報量としてはそんなに違いないのかなというふうに思います。それから、大日本は分冊になっていて、他社はみんな学年1冊になっております。これも薄いほうが良いという考え方もありますし、合冊になっていれば単元を入れ替えたり融通が利くので使いやすいという点もあるので、これも一長一短でどちらとも言えないと思いますので、サイズ、分量からはとりあえずは考えないで、内容で本区にふさわしいものを考えてみました。本区に限りませんが、理科離れを食い止めることが大事です。子どもたちが自然に主体的に関わり、自らの問題として解決していくことが望まれるわけですが、そのためには、理科室で先生に与えられた実験をやるだけではなく、なぜその観察、実験が必要なのかを意識するように仕向けたいわけです。指示された手順に従って実験や観察を経験していただくだけでは、問題を解決する力は育たない。身近な事象から問題を見つけ、意識して、見通しを持って観察、実験に臨むことから始めたい。そのためには導入に時間をかける。だから、考察もみんな考えを出し合うということが必要になると思います。そうすると、必然的に時間がかかる。一つひとつを丁寧に深めていくことが大事だろうと思います。初任者や、それに近い先生方、理科が得意でない先生方というのは結構多いと思うんですけども、子どもたちに自然への関心を持たせることは難しいと思います。ですから、ある単元の学習を始めるに当たっては、問題意識を持たせるように工夫させたい。そういうことで、

単元の導入に当たって問題意識を持たせることを意識しているかどうかということを経験でチェックしてみましたところ、教育出版と学校図書の単元の始まりのところですが良いです。例えば、これは学校図書ですけれども、ある単元について、メインの学習の前に、それに導入するためのページがあります。それから、教育出版も、これは「学びのとびら」ということで単元の始まる前のページに学習に関係のある状況のような写真を入れて、導入の言葉が入っております。私は、そういう手順が大事なのではないかなと思います。単元があって、すぐにこれについて調べましょうという展開では問題意識が深まらない。実験についても、実験をするために何が必要か、見通しを持ったり手順を考えたりすることも必要で、本区では児童の実態から考えて、一つひとつの展開に時間をかけて充実させていくことが必要ではないかなと思います。導入に時間をかける。それから、後でもお話ししますが、まとめにも時間をかけるためには、一つひとつをじっくりやるということですね。手元の調査資料によりますと、観察、実験の数が一番少ないのが教育出版です。例えば内容Aの「物質・エネルギー」での観察、実験の総数が、啓林館が60、他社も50以上あるのですが、教育出版は45です。それから、内容B「生命と地球」で、大日本は73、啓林館62、学校図書64、東京書籍57に対して教育出版は54であります。それから、「ものづくり」についても21で一番少ない。一番少ないということは、逆に考えれば一つひとつのものに時間がかけられるということで、実験に時間をかけたり、話し合いに時間をかけることができるようになるだろうということで、そういう意味では教育出版が良いのではないかなと思います。一方で、理科を得意とする子どもたちもたくさんいるわけですから、もっと深く知りたい、広く知りたいということがあるわけですが、そのような子どもたちに対応するために、いろいろ発展的な内容の問題も触れることがあって良いと思うのですが、この発展的な内容の数は啓林館が突出して多く、102となっております。その次が教育出版で57、あと大日本47、東京書籍31、学校図書37となっております。そういう発展的な内容については啓林館が断トツで多いけれども、その次に教育出版があって、そういう意味でも好きな子、得意な子には発展をさせることができるという意味でも、教育出版が適当ではないかなと思っております。

○久保教育長 私も理科の本を見ていて、大判のものと小さいものとあるんですね。何でこの大きさになるのかなと気になっていました。分冊になっているのは、この大日本だけで、それ以外は学年1冊です。大判ですと重くなりますから、私としては大判であることが積極的な意味を持つのかということところが大事だなというふうに思って、少し比べてみたのですが、写真が大きかったり、いろいろな意味で使われている意味では、どちらかというところアトラクティブなところが、つまり見映えがする写真が載っているわけですね。小さいと、やはりどうしても写真が小さくなるわけですね。ということで見映えの良さという点では確かに大判というのはそれなりに効果があるのかなという気はいたしますが、だからといって、特に内容が充実しているということではないよさというのだけは少し感じました。ですので、写真のインパクトも大事かもしれませんが、むしろそれは日々の活動のほうでやっていけばいい話だと思いますので、そういう点ではあまり大判の機能というのは特段優れているとは思えないなと思いました。それで、3年生のところをいろいろ見せていただいたのですが、改めて理科についての感覚が少し変わったような気がいたします。かなり体験的な内容とか実感的な内容とか、もう一回生活体験といいますか、さまざまな体験を繰り返している活動が、特に3年生あたりのところでは多いと思いました。どの本を読んでも同じですから、多分それが課題なのだろうと思います。ただ、できればそれは1・2年のうちにやっておいてもらって、3年からはもう少し学びの整理の方に向かってもらえればもっと良いのではないかなとの思いがありますが、これはどの教

科書も一緒ですから。ただ、体験したものが整理されているということはとても大事なのだろうというふうに思いました。そういう点では、分かったこと、調べたこと、調べよう、と次のページに分かったことをまとめて書こうという意味では、非常にシンプルで、教育出版はまとめやすいなという感じはいたしました。それから、小学校の理科を見ていて不思議に思ったことがもう一つありまして、例えば3年生に入って、植物のことをずっとやっていて、自然観察が入っているかと思ったら、途中で突然ぽつんと「かげと太陽」が入ってきたり、「風やゴムの働き」という単元が間に入ってくるんですね。またその後、自然観察が続く。なぜかなと考えたら、確かに植物が成長していく過程で途中、観察が途切れることもあるので、そこに何かが入ってくるということだと思うのですが、そう考えると、やはり教科書というのは分冊ではなくて1冊のほうが良いのかなと、単元に融通が利くという意味で良いのかなと改めて思いました。そういう点では大日本は、分冊にして工夫はあるのですが、どちらかといえば、むしろ学年でまとまっていたほうが良いのではないかというふうに思いました。あと、気になったのは、先ほど、教育出版が一番比較的あっさりしていて、まとめやすいという点があるとのことでしたが、このゴムで四輪車をぽんと離すという単元があるんです。46ページから「ゴムの力」というのが始まっているんです。実は、ほかの教科書では、この同じ単元の同じ内容、ゴムの力を入れるときの絵がとても気になりました。これは荷物運ぶときに手で持つやつですね。これを使って、これを何か発射器の代わりに使うように書かれているのですが、一方をセロハンテープで固定して、それを輪ゴムで引っ張ったらセロハンテープがはげてしまうのではないかというのが気になったんです。ほかの教科書を見ると、そうではなくて、発射台はしっかり固定された、例えばこの学校図書ですと、87ページ、あるいは85ページあたりに載っていますけれども、地面のほうにフックを置いて、そこから下にもフックをつけて、これは動かない、強烈に固定をしなければいけないと思いますが、引っ張っているんですね。この引っ張り方だと、引っ張った長さとか、そういう比例関係がとりにくいだろうし、それから、この加減が、手の加減と発射のタイミングとの比例関係が上手にいかないのではないかなというのが1点気になりました。ほかのやつはちゃんと発射台も、それから、引っ張るほうも当然、発射台のほうがちっと固定されていますので、引っ張ったときの引っ張り方がすっきりするんですね。もちろんゴムの長さとか、いろいろなものがあると思いますが、それだけが少しこれで気になった部分がありました。場合によっては、その部分だけを引いてきたら、ほかの方法のほうが良いかなというふうな気もいたしました。全体を通して見ると、比較的あっさりとして、かつ分かりやすくまとめられているのは、教育出版が1番かな、そういうふうに思いました。啓林館も私こういうの好きなんですけれども、どちらかという、やはり教育出版のほうが良いのではないかと思いました。

○鈴木委員 私は理科の教科書がこんなにカラフルで、時代の流れを感じました。アインシュタインが出てきたり、アトムが出てきたり。結論から言うと、私も教育出版が良いと思います。まず記録の書き方なのですが、学校図書は、例えば3年生の12ページの記録しておきましょうというのは良いのですが、例えばタンポポを見たときに色、形、大きさ、どんなところというふうに、最初から分類をしまっている。教育出版は観察したものは絵で表して文で説明を加える。気づいたこと、感じたこと、思ったことというようなことで、理科的にはやはり、何に自分で気が付くのかということのほう的大事かなというふうに思います。教育出版は実は6年生になると、かなり高度になってきて、例えば75ページ、これは、梔子なんですけど、梔子の予想と調べ方、そして78ページになると、結果、分かったこと、感想というふうに、要するに考え方の流れが非常にまとめやすいなということを感じまし

た。ただ、教育出版は「学びのとびら」の最初にメッセージを出しているのですが、例えば6年生の81ページに、崖などの研究者のことを「しま模様を調べる達人」と書いてあるのですが、この人うれしかなと少し思いました。また、単元ごとに「たしかめ」で括弧の中に知識を確認して入れるというところがあるのも教育出版の良いところかなというふうに思って、私は教育出版が良いのではないかなというふうに思いました。

○高杉委員 私も教育出版で良いと思います。まず最初、やはり理科の場合、大判の教科書のほうが観察する対象とか情報量も多くて、実験の仕方も詳しく書かれているという感じがしまして、良いかなとは思ったのですが、今のいろいろ皆さんの話を聞きまして、少ないほうが理科的な考え方を実践できるという、じっくり先生も児童も実践できるということもありまして、それもそうだなという気がしました。教育出版も重要なところは折り込みで大きい判になっておりますので、それで十分補っているのかなという気がしました。そして、何と言っても理科的な考え方、やはり観察して、実験してということがやはり重要な位置で、その理科的な思考の順序というのがあると思うんですね。そんなときに、今、先ほど鈴木委員もおっしゃいましたが、はてなから始まって、調べよう、予想しよう、計画しよう、結果から考えよう、分かったと、その後、学んだことを使おう、こういうステップがすごく魅力的に感じました。他社は、いろいろ部分的にはそういうものはあるのですが、全編を通じてこういう流れというのが教育出版よりは弱いように感じましたので、教育出版で良いかと思えます。

○高木委員長 何か理科とはあんまり関係ないのですが、お天気の話があつて、これは東京書籍でしょうかね。これは4年生の16ページと、それから、5年生の7ページでしょうか、国技館の写真がありますね。ところが、これよく見ると同じ写真のような気がするんです。雲の量がゼロから8のときを晴れとするというのと、晴れとするという写真が同じですよ。こういう写真があると、もちろん身近に感じることは事実なんですけど、やはりどうせ2年にわたって両国国技館載せてくれるなら、少し別の角度のほうが良いと思うんです。ぜいたくと言えどぜいたくなのですが、いずれにしろ、そういう身近なものまで最近では理科で取り上げているというのが、まず一つの印象です。教育出版に限らないのですが、一番最後に何を上げているかというのが一つのポイントになるかと思うんですね。この教育出版では、「わくわくチャレンジ」で発展的にやろうとしている人のガイドラインを作っています。だから、こういうのがあると理科の好きな子どもたちも、そういうのに積極的になれるし、それから、確かめの中で処理されているのは整理用に良いのだと思います。ですから、途中で止まってしまう児童と、それから、チャレンジまでいく児童というふうに使い分けができるというところが良いかなと思っております。

○横井委員 補足してよろしいですか。3年の教科書の始まりのところを見ていただきたいのですが、観察のほかに、今度は自分で栽培をしてというのがありますね。どの出版社もハウセンカを育てようということになるわけですが、実はこれ丁寧に見ると違いがありまして、今、推薦しました教育出版は14ページの一番下に、「ハウセンカとマリーゴールドを育てましょう」となっております。それから、学校図書も同じく14ページ、「ハウセンカやヒマワリの種をまきましよう」となっております。「と」と「や」が違います。それから、啓林館は12ページにハウセンカ、これ少しよく分からないのですが、ハウセンカがあつて、これを育てようと言っているわけですね。13ページに、真ん中に、同じ啓林館です。「ハウセンカの代わりにマリーゴールドやヒマワリを育ててもよい」と書いてあります。違いますよね。それから、大日本図書は10ページに「ハウセンカ、ヒマワリ、オクラ、大豆、マリーゴールド」とありまして、12ページの上のほうに書いてありますが、「二つの植物の種をまきましょ

う」ですから、どれでもいいわけですね。挙げられているもののうちの例えばヒマワリとホウセンカなど、育てる植物を二つ決め、種の様子を観察しましょうとなっているわけですね。それから、東京書籍も10ページに、いろいろな種がいっぱい出ておまして、13ページに「育てる植物を選んで種をまきましょう」となっております。ここでは何種類かの植物を育てて比較をすると、どれも植物は同じだ、似ているところと似てないところがあるというようなことを勉強していくわけですが、まず、啓林館はホウセンカをまいて、それから、その代わりにマリーゴールドやヒマワリを育ててもいいと言っておきながら、後のほうではマリーゴールドやヒマワリと比較しているんですね。これ多分チェックミスで訂正されるかもしれないのですが、一つだけまいておいて比較するというのは無理なので、そういった意味でこれは少し問題がある。それで、教育出版は二つ指定しているわけです。学校図書はホウセンカやヒマワリの種をまきましょうと言ったら、これは一つまくのか両方まくのか、別のものでもいいのか、少し日本語としてわかりにくいところがあります。ということで、大日本と東京書籍は何種類かの中から適当なものを選びなさいということですが、具体的に3年の担任の先生が4月早々に担任を持ったときに、種を何種類も用意しておいて、さあ、皆さん好きなものを選んで、二つ選びましょうというのは、好きな、得意な方なら全然問題ないんですけども、初めて受け持つような先生たちにしてみると、非常にやりにくいのではないかと思います。これとこれをまきましょうというふうに指定してあるほうが分かりやすい。そういう意味で教育出版が適当な表現がなされているのではないかなというようなことも感じるわけでありませう。

○高木委員長 教育出版で一つ特徴的なのは、最初に自然に対するメッセージなどが出てくるんですよ。そういうのが教育出版がおもしろい一つの特徴です。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、理科について採択をいたします。理科は教育出版株式会社を採択することにしたと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○高木委員長 それでは、教育出版株式会社を採択することに決定いたします。

それで、ここで10分ほど休憩をとりたいと思います。

(休 憩)

○高木委員長 それでは、再開したいと思います。

生活について審議をしたいと思います。

指導室長、ご説明をお願いします。

○指導室長 はい。それでは、生活科の教科目標をご説明いたします。生活科の教科の目標は、具体的な活動や実験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う、となっております。改善の内容のポイントを5点ほど申し上げたいと思います。1点目は、すべての内容において、具体的な学習活動や学習対象を示すとともに、関心をもつこと、気付くこと、分かること、考えることなどを明確にしたこと、2点目は、言葉などを中心としたコミュニケーション活動を通して、体験したことを他者と情報交換することを目指した「生活や出来事との交流」の位置づけが行われたこと。3点目は、自然の不思議さや面白さを実感する学習活動が取り入れられたこと。4点目は、安全教育や生命に関する教育の充実が図られたこと。5点目は、幼児教育その他教科との接続の部分が色濃く出されたこと等がございます。本区の児童において、活動内容及

びねらいが明確に示され、達成すべき内容が分かりやすいものがふさわしいと考えておりますが、また、生活上必要な習慣や技能が確実に身に付くような観点からも教科書の採択のご意見を賜りたいと思っております。生活の現在使用している教科書は、「大日本図書株式会社」でございます。全7社からの採択をお願いいたします。

○鈴木委員 それでは、室長からお話がありましたけれども、私も生活科の教科書を拝見していて、本当にこれだけの差があるということにすごく驚きました。室長がお示しくくださった視点の中でも、特に幼児期との連携ということに関して、私はやはり幼児期の年長さんが育ってきたものを小学校1年生の生活科で、さらに発展していく教育をというふうに考えていくつかを見せていただいた結果、私としては啓林館を薦めたいなというふうに思っております。その理由は、まず一つは、最初に学校に入学したときに学校の探検というような単元がございまして、どこの出版社でもここは取り上げております。「みんなでわくわくがっこうたんけん」とか、「がっこうのひととなかよくなるろう」とか、「なにをしているのかな」というような、見学ツアーみたいな、そういう形の中で啓林館が話をしてほしい三つのことという視点を出していきまして、どこに行ったかな、何を見つけたかな、どう思ったかなというように、自分が感じたこと、考えたことを整理できるような視点を生活科の最初に出してきているというところが良いなというふうに思いました。その後で、いくつか室長からも話がありましたが、私は、生活科を見ていく視点の中で、一つ目は幼児期との連携、二つ目は3・4年生の理科と社会につなげていくための学習の記述力とか発表力とか、そういう思考力の基礎みたいなことをどういうふうに培っていくかというようなことがすごく大事だと感じました。その視点を見ていきますと、記録のとり方ということに関して、例えばいろいろな会社、全部カードでという形をとっています。例えば、教育出版は「おおきなあれ」みたいな感じで、「たねをまいたよ」というような形になっておりますが、それをどうしたら良いのかという視点が啓林館のほうに書いてあったのと、それから、もう一つ啓林館には「せいかつめいじんブック」という付録が付きまして、ここに記録のまとめ方というコーナーを持っています。記録のまとめ方の1は、最初カードです。カードを書いてみましょうというところからスタートして、今度は作文、手紙というふうに文章量が増え、さらにめくっていただきますと、記録のまとめ方2では、本にまとめよう、紙芝居やクイズで表そう、壁新聞やポスターで表そうというふうに非常に段階別に子どもたちの発表力をつける、そういうような工夫がされているのと、自然という意味からも、これを持って遠足に行けるかなというようなことで、便利です。他社のというか、実は区内の方々の展示会でのアンケートの中に、生活科は絵本が一番近いと、教科書は絵本でいいのかというようなご指摘があり、生活科というのが確かに幼小連携という点を考えますと、絵本みたいなところもかわいいなとは思いますが、あくまでもやはり学習として理科、社会につながっていく基本を育ていきたいという視点から考えると、物の見方、考え方ということがすごく大事なのではないかと感じて、そういう意味では啓林館がよろしいのではないかなと私は感じました。

○久保教育長 私も啓林館が一番良いと思います。今まではどちらかというやさしいほうが良いと言ってきたのに、今度は難しいのが良いということで少し矛盾に感じるかもしれないのですが、先ほど理科のときにも申し上げましたけれども、体験重視で体験の中から自ら掴み取っていくものを大事に育てて、広げていくんだよというのは、それはそれでよく分かるのですが、今、鈴木委員もおっしゃいましたように、結構幼稚園までの課程で、それなりに体験というものをこなしてきていると思います。それを自分なりに整理をしていって、いろいろなものの法則性とかについて理解を深めていくという

課題が順々に形成されていかなければいけないというふうに考えますと、生活科の2年間というのは次に社会科や理科を意識したような誘導も考慮していい時期ではないのかなというふうに思います。どこでもやれないことはないのでしょうけれども、明快にそういう意識付けが行われているのは啓林館かなというふうに思いますので、私もそういう意味で啓林館が良いと思います。

○高杉委員 生活の教科書を全部見たところ、大日本図書と啓林館が心に残りました。大日本図書は横幅が広くて、載っている写真とか、そういうのは当然ながら大きくて余裕があります。そして、本の中に登場する子どもたちの会話が吹き出し形式になっています。どこの会社も吹き出しを使っているのですが、ほとんど全編にわたって吹き出しで構成されているのは、この大日本図書です。児童がこういう、漫画ではないのですが、1・2年ですから、こういう形式だと授業に入っていくやすいかなという気はしました。啓林館は、普通のサイズではあるのですが、上下とプラス別冊というふうに分かれております。ほかの教科書より全体的に各單元について詳しく書いてあるように感じました。それが3年生から始まる理科という教科につながっていくのには、この程度の詳しさが必要ではないかなと思いましたが、もう一つ、鈴木委員もおっしゃいましたが、特徴としてこの別冊の「せいかつめいじんブック」というのがあります。これは子どもたちの生活の中で使いやすいかなと、ちょっと持って遊びに行けるといったこともできるかなという気がします。私は3年生からの理科につながりやすいということも重要なことだと思いますし、またこの別冊がなかなか気に入りましたので、啓林館が良いかと思えます。

○横井委員 私は、この教育出版の生活を見てみますと、各ページのふちに色がついていて、その見開きページのねらいみたいなものが、ぱっと分かるようになってるのが、使い勝手がよさそうだなと感じております。あと、ところどころに、今言っているのは上巻の49ページの右下に、「しっかりせわができたかな」というので、花のマーク三つ、自己評価をするページがところどころにあるんですね。よくできたと思ったら三つに色をつけたりするんだらうと思うんですけども、またその振り返りをすると。それから、一番後ろ、巻末にメモリーノートというのがあります。どういう勉強をしたかということ振り返る、4月にはこういう勉強をしました、5月にはこういう勉強をしましたというようなことをずっと記録して、こういうことをやったんだと振り返るようなことになっているかと思うんですけども、そういうふうなところも工夫があつてよかったなというふうに思いました。今ご推薦のあった啓林館も、私もこれも良いなと思って見ておりました。これは調査によりますと、活動数を各社数えた調査があるんですけども、絵が小さい分、いろいろな活動がたくさん含まれているということだと思うのですが、啓林館がすべて、家族との関わりを取り上げた箇所、地域の人の関わりを取り上げた箇所、公共施設の種類の種類、みんな一番多いですね。栽培植物の種類や数も多いです。飼育動物は日本文教出版のほうが多いけれども、それからあと、そういったことで全体として見ると啓林館が内容的にはいろいろなものを網羅されていて良いのかなというふうに思いました。それから、皆さんおっしゃっているように「せいかつめいじんブック」は、これは教科書展示会に来た保護者の方も言っておりますけれども、家庭でも使いたいと、使い勝手は良いかもしれないと思います。

○高木委員長 私も東京都のこの調査見ていたら、総括表を見ると、今、横井委員が言われたように、啓林館が特に身近な人々、社会との関わり関係でほかの出版社より活動数が多いということが分かります。生活は3年からの理科、社会とつなげるということですが、身近な人々、社会との関わりが強いと、いわゆる社会との関係が一つ出てきます。それで、3年生の社会というのは身近な町とか、隣町とか、そういうのを調べるということから入っていきます。そうしますと、この62ページあた

りから全部そういう町の話になっていますね。これ多分そういうリンクを考えた構成になっているのだと思います。ただ、ここではこれ意識的にやっているのだと思いますが、春夏秋冬で、82から83ページですね、カードをベースにして町の様子を入れていくと、こういうところから1年生は入っていきこうというふうになっています。それと同時に、生活習慣が絡んできますから、86ページに地域の人の関わりについての配慮があったと思います。ただ、82ページのこのようなカードにしても、絵を描くだとか、いろいろカードは工夫が要りそうな感じがしました。ただ、接続はそういう意味で啓林館、割と配慮しているというふうに思います。好評の「せいかつめいじんブック」ですが、これ何に使用しますかね。

○鈴木委員 昔の遊びとかも出ていますよね。メンコとか。

○高木委員長 私はこの46ページから49ページの「まちでみかけるもの」というところを少し見ていたのですが、50ページから今度は理科系の植物の観察の話ですよ。だから、これはこれで非常に特徴的でアクセントがついているのだと思います。私もこの啓林館で結構だと思います。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、生活について採択をいたします。生活は株式会社新興出版社啓林館を採択することにしたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○高木委員長 それでは、株式会社新興出版社啓林館を採択することに決定いたします。それでは、続きまして、音楽について審議をいたします。指導室長、ご説明よろしくお願いします。

○指導室長 はい。音楽の教科の目標でございます。表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う、となっております。音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力の育成、音楽と生活との関わりに関心を持って、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むことが重視されております。現在使用している教科書は、「株式会社教育芸術社」でございます。全3社からの採択をお願いいたします。

○鈴木委員 音楽の一つの節目になるのは3年生のリコーダーの導入だと思います。3社とも、とてもすてきな教科書なのですが、リコーダーの導入の部分と同時に、日本の心の歌であったりとか、そういうものをどのように取り上げているのかなというようなことも含めて検討させていただきました。その結果、一番あっさりと言われているのが東京書籍で、例えば「茶摘み」なんかも、お茶の畑にあかねだすきの女性がいてというような説明が載っています。一番詳しいのが教育出版で、教育出版は見開きではなく4ページにわたり、例えばお茶畑があって、めくっていただくと、あかねだすきの女性がいて、その説明文も一番詳しいです。東京書籍と教育芸術社は「赤い色のたすき」と書いてあるんですが、例えば教育出版は「袖をたくし上げるための肩からわきにかけて結ぶ赤い色のひも」と書いてあります。非常に丁寧ではあります。そして、遊びの内容とかもとてもクリエイティブといえますか、非常に創造的で昔ながらの茶摘みのリズム打ちなんかも書いてあります。逆に教育芸術社は、日本のどの地域に、どんなお茶ができるのかというようなことで、八女茶であったり宇治茶であったりというようなお茶の産地が書いてあります。この3社を比較した結果、1年生から見て音符に階名が付いているのが、この東京書籍と教育芸術社だけなんです。つまり教育出版は非常に高度なんですね。もう最初から、ある程度ドレミファソラシドを教えれば読めるというふうな視点があるのかなと思います。そういう意味では、6年生の創造的な音楽活動を見ても、その子どもたちの創造力を生か

して、始まりの部分、中の部分、終わりの部分みたいな形で、自分たちで作っていくという活動がすごく強い。そういう意味では中間をとって教育芸術社は、丁寧に譜面も出ていたり、それから、笛が各ページに、例えば3年生で、リコーダーはどこを押さえるとこんな音というようなのを丁寧に書いてあったりする。東京書籍はそれは割とあっさりとしているけれども、各ページに音階が振ってあったりするということなどところのそれぞれ良さがあるのですが、一つ少し気になったのは、東京書籍だけがメロディーのことを「旋律」と呼ばず「節」と書くんです。例えば新しい音楽3の18ページ、「節の特徴を味わおう」というふうに書いてあります。教育芸術社と、それから、教育出版は旋律という形で、旋律の説明も出ています。今、実際に音楽教育の場において考えてみると、節という表現はなかなか使わないかなというふうに思います。メロディーは旋律というのが一般的かなというふうに感じて、いろいろ聞いたり調べたりしたところ、やはり今、レコード会社等でも旋律というので統一しているということであったので、そういう意味では現在使用している教育芸術社のものを引き続き使うということではいかがかなと思います。私としては教育芸術社を推薦させていただきたいな思います。

○久保教育長 今ご指摘がありましたとおり、東京書籍だけ本の大きさがこれだけ小さいんです。大きいのが良いというわけではないのですが、大きいほうが、情報量が多くて、それで先ほど鈴木委員がおっしゃいましたが、導入のところにも欄外に必ず笛の絵があって、リコーダーのことが書いてあって、それについて、大きさを利用してそういうことが可能になっているという意味では、こちらの東京書籍のほうは、そういうものもないわけではないのですが、やはり弱いんですね。その分だけの情報がとりにくいというところがありますから、弱いと思いますので、これは大判が生かされているかなというふうに思いました。これ両方比べてみて思ったのですが、やはり先ほどリコーダーの導入等については、教育芸術社のほうが強いなという気はいたしました。これは感覚的な話なのですが、見たときにとっつきが良いなという感じがいたしましたし、例えば手の置き方とかも、こちらのほうが分かりやすいなというふうに思いました。やはり音楽は、高学年にいけば専科の先生が教えるんだと思いますけれども、低学年の場合、必ずしも専科の先生が教えるとは限らないとなれば、子どもが分かりやすいほうがよいのではないかなという点では、教育芸術社で良いのではないかなというふうに思いました。

○横井委員 私も音符に階名を振らないというのが、一つの見識ではあるけれども、具体的に教室の中でのことを考えたり、指導する先生のことを考えると、やはりあったほうが教えやすいと思いますので、東京書籍と教育芸術社となりますが、これまでに話題に出たように、広いこのページをうまくレイアウトして指使いが分かるような、リコーダーの絵は本当にうまく使ったなと思いますので、教育芸術社でよろしいのではないかなと思います。

○高杉委員 今、皆さんがおっしゃったことにつけ加えれば、その教育芸術社が、レベルとしてはちょうど中間ぐらいのレベルなのかなと。また何度もお話に出ました音階が振ってないとか、少し難しい教科書では、音楽の不得意な子には少しきついなということがありまして、皆さんのおっしゃったことを鑑みまして、教育芸術社でそのまま良いのかなと思いました。

○高木委員長 リコーダーは一つポイントになるかとは思いますが、それは3社ともそれなりにできていることは事実だと思います。そういう意味で教育芸術社もちゃんとしているようだという事だと思います。また、教育芸術社だと6年の33ページ、「花」が出てきますよね。これ墨田区の区歌です。ただ、これ6年ですから、隣が「箱根八里」なのですが、これ言葉が難しいんですよね、6年生用な

んですよ、やはり。こういう日本のいわば音楽ですね、というのが入っているのが良いというふうに感じました。6年の目次見ると、「みんなで楽しく」ということで「浜千鳥」から卒業式でよく出てくる「旅立ちの日に」まで、ずらっと出てきますよね。こういう配慮もやはり卒業式なんか意識しているのかなという、細かいところで気を使っているという、そういう印象を持っています。ですから、教育芸術社で私も構わないと思います。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、音楽について採択をいたします。音楽は株式会社教育芸術社を採択することにしたと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○高木委員長 それでは、株式会社教育芸術社を採択することに決定いたします。それでは、引き続きまして、図画工作について審議をいたします。指導室長、ご説明よろしくお願います。

○指導室長 はい。それでは図画工作の教科の目標をご説明いたします。表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、作り出す喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う、となっております。採択に当たりましては、「感性を働かせながら、作り出す喜びを味わう」ことが目標とされている教科の特性を鑑み、児童の興味・関心を引く鑑賞教材の掲載や表現・造形的な活動の動機付けとなる構成等を考慮いただき、ご審議いただきたく思います。図画工作の現在使用している教科書は、東京書籍株式会社でございます。全3社からの採択をお願いいたします。

○高杉委員 まず、図画工作の教科書を見ますと、東京書籍だけが1・2年、3・4年、5・6年、3冊で、他のものが2冊になっております。ただ、これは薄いものですから、量とか重さはそんなに考えなくていいのかなというふうに思って、それを無視して考えました。まず、3・4年とか5・6年の教科書を例にとって比較してみました。3・4年では東京書籍では「ギコギコトントン」というような、開隆堂では「くぎうちトントン」、日本文教出版では「トントンサクサク木の名人」というのがあります。東京書籍は17ページ、開隆堂では24ページ、そして日本文教出版が20ページですね。これを見ますと、東京書籍では子どもの作品の写真正が大きく出ています。東京書籍だけが実際の金づちの打ち方とか、そういうものは巻末にまとめて載せています。ほかの2社では、子どもの作品と金づちが、その同じ紙面の中に載っております。これが違いです。日本文教出版では、子どもの作品と金づちの使い方が載っていますが、金づちの使い方に比重が多くなっております。開隆堂は、作品と金づちの使い方が出ておりますが、作品の比重が大きく、重くなっています。開隆堂のほうが作品の写真正ですとか色遣いも非常にきれいです。それで迫力があると思います。5・6年では「糸のこすスイ」ですとか、開隆堂の「糸のこのドライブ」、日本文教出版の「板を切りぬいて」とか、いろいろな単元がありますが、それを比較しても、大体傾向としては同様の傾向です。図画工作の目標というのは、表現及び鑑賞の活動を通して感性を働かせながら、作り出す喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を養い、豊かな情操を養うということが目標ですから、そういう点から考えますと、開隆堂の作品の迫力や構成が目標に近いような気がします。私は開隆堂が良いのではないかと思います。

○鈴木委員 私は、また少し違う視点から、どうやって見せるかというようなことを考えたのですが、図画工作というのはやはり鑑賞というところがあって、鑑賞ということは、その場の雰囲気を含めての鑑賞だと思うので、東京書籍はどちらかというと物撮りというか、物を抜いて見せるという形のもの

のがすごく多いのですけれども、今、高杉委員のおっしゃった開隆堂は、非常にバックがそれぞれに工夫がありまして、淡いブルーであったりとか、それから、影が映るようになっていたりというような、一つ見たときの見せ方というのも、実は私はすごくこの領域には大事なのではないかというふうに思います。日本文教出版は割とグレー一色という感じのところでありまして、見やすいかもしれないけれど、美術としての感じ方というか、そういうところに目を向けるような子どもたちになってほしいなという思いを込めて、私も開隆堂が良いのではないかなというふうに思いました。

○久保教育長 色使いから言うと、やはり東京書籍と日本文教出版は上手ですね。グラデーションを入れたりして、少し目を引いてみたりとか、作り方が上手だなという気はいたしました。これはもうサイズは関係ないんですね。日本文教出版と開隆堂は少し大判なのですが、開隆堂はページ数も比較的少ないように思いますし、どう作るかという説明が割とあっさりしていて、むしろ、自分でいろいろなことを考えて作ってみましょうと触発するところが多いような気がします。そういう点では、ほかにはページ数も多いですし、作品も見せている部分も結構前段では多いし、いろいろとある意味では触発される部分もあるというふうに思いますが、東京書籍は何となく穏やかです。穏やかという印象が、すっきりまとまっているような感じがして、むしろもう少しいろいろと触発するためには、少し刺激の強いほうが良いのかなというふうに思っていて、そういう意味では触発の要素が強いのは開隆堂かなと思いますので、私も開隆堂で良いと思いました。

○横井委員 私も皆さんの意見に同感です。各ページ、かなり感覚が物を言うと思うのですが、これ技術的なものですから、いろいろな取り方で良いと思うのですが、開隆堂はどのページも色が鮮やかですね。もちろん他の教科書も、それだけとってみれば鮮やかになっているのだらうと思いますけれども、他の教科は、あまり鮮やか過ぎては教科書としての中身のほうが問題になりますけれども、少なくとも図画工作の教科書においては、この鮮やかな色というのは重要と考えて良いのではないかと思いますので、その鮮やかさをとりたいたいというふうに思います。

○高木委員長 図工は先ほどの高杉委員のように、自らが作るようなこともあれば、もう一つ鑑賞という立場があると思います。そこで、各出版社を見ると、5・6年の最後のところが大体そういうことに充てられているようです。日本文教出版だと、例えば36ページとか、37ページとか、それから、東京書籍ですと29ページとか30ページとか、それでいて、開隆堂ももちろんあります。開隆堂にも5・6年の下で風神・雷神図でも良いのですが、そういう美術関係が載っている。それで、開隆堂が特徴的なのは、目次ではないかと思えます。この5・6年の下を見ると、絵があつて工作があつてとかということで仕分けされているんですね。こういうのが、しかも、自分がやるときは、右に主な材料まで載っているというような工夫がされているように思います。それから、もう一つ、開隆堂だったと思うのですが、5・6年下の38ページですね、これ何を意味するのかよく分からないのですが、赤い物語というのがあります。空襲ではないと思うのですが、先ほど鮮やかなほうが良いと言いましたけれども、まさにこれは鮮やかなケースとして取り上げられています。だからこれ、なかなか分からないようになっていますが、要するに、墨田区にとって身近な印象を与えるという意味でも開隆堂が良いのではないかと思います。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、図画工作について採択をいたします。図画工作は開隆堂出版株式会社を採択することにしたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○高木委員長 それでは、開隆堂出版株式会社を採択することに決定いたします。それでは、引き続きまして、家庭科について審議をいたします。指導室長、ご説明よろしくお願ひします。

○指導室長 はい。それでは、家庭科の教科の目標についてご説明いたします。家庭科の教科の目標は、衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にすることを育み、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てることとさせていただきます。「家庭生活への関心を高める」から「家庭生活を大切にすることを育み」とし、家庭生活への関心を高めるとともに、衣食住などの生活の営みの大切さに気付くことの重視や「生活を工夫しようとする」から「生活をよりよくしようとする」とし、生活をよりよくしようとする能力と実践的な態度を重視しております。家庭科の現在使用している教科書は、「開隆堂出版株式会社」でございます。全2社からの採択をお願いいたします。

○鈴木委員 家庭科は2社だったのですが、非常に中身が濃くて、昔、家庭科を習っていたころから比べると随分親切で、一つひとつ丁寧にきちんと書いてあって、すごく感動しました。両方ともとても良いところがあり、作業の順番、流れがとても丁寧に書かれているというのは両方とも非常に良いところだなと思いました。ただ一つ、私としては、やはり繰り返して学ぶということを大切にしたいというふうに考えると、開隆堂の家庭科は説明がすごく丁寧なのですが、1回できてしまうと、それを繰り返してやりましょうというようなところが弱いかないところも少し感じました。東京書籍は、例えば4ページの食育チェックにしても、6ページの環境チェックにしても、3回もチェックする欄があり、自分で振り返ってやってみるといふところの丁寧さがあると思いました。それと、今、人間の家庭生活の中で、例えばお茶を入れるとか、お箸を持つとか、当たり前のことと言われてきたことが、なかなか実際問題としてできていないということが多く、その中では東京書籍が、例えば15ページ「日本の伝統」に「日本茶のいろいろ」というコーナーがあり、お茶の入れ方の最後に、茶卓を載せているんですね。茶卓を載せているのは東京書籍だけだったんです。それと、もう一つ、これが良いのか悪いのかは少し分かりませんが、49ページに、お箸の持ち方も写真で出ておまして、それを5年生、6年生の教科書で載せることが良いか悪いかはまた別として、でも、実際問題は持てない子も結構いるというようなことを考えますと、日本の文化とか伝統とか、それから、自分の生活を繰り返し繰り返し見直してみるというところから考えて、東京書籍の家庭科を推したいなというふうに考えております。

○高杉委員 家庭科ですが、まず、専科の先生がいる学校とない学校もありますね。墨田の場合はいない学校も多いのではないかと思います。一般の先生方でも進めやすいのはどちらかなという観点で見ました。そうしますと、東京書籍の場合は、まず1ページ目の見開きで、1、見詰めよう、2、計画しよう、活動しよう、3、生活に生かそうということが全編にわたって統一されています。ですから、授業の進め方としてはある程度素直に進められるのではないかと思います。そして、開隆堂もある程度、2年間で学ぶ家庭科ということで、2ページ目には全体が載っていたりして、見やすく構成されているのですが、素直に1、2、3の順番で構成されている東京書籍に比べれば、少し弱いかないという感じがしました。これは一般の先生にとっての授業のしやすさという点で見るときには、東京書籍が良いかなと思いました。あとは、ほかのことは今、鈴木委員が言ったようなことと共通いたします。そんなことで私も東京書籍が良いのではないかと思います。

○横井委員 今、世の中全体が個性尊重といひますか、他人はともかく自分さえよければいいという風潮があったり、一方では、他人の目を気にして自分を出せなくなっている子どもたちが多くて、生活

のよりどころみたいなものが希薄になっているような気がいたします。だから、そういった個人神話を誤解すると、我が子より自分がかわいいから乳幼児虐待になったり、高齢者が行方不明になっても平気であるというような風潮になっているとすると、やはり基盤である家庭というのは非常に重要だし、そういう点でも家庭科教育というのは考えなければいけないんだなというふうに私は思っております。もちろん基本的な人権を尊重しつつ、やはり家庭の生活も重視する。それから、和の伝統も重視するという意味では、先ほどの茶卓だとか、お箸の持ち方だとかも重要なことだと思いますし、そういう点で例えばこの東京書籍の最初の単元のこのページが、私は大変良いと思うんですね。こういう雰囲気ですね。私が今言った問題の対極にある良い家庭の雰囲気なのではないかなと、必ず3世代同居しろという意味ではありませんけれども、そういうようなことをお互いに大切にしようという気持ちを育む上でも良いのではないかなと思います。具体的な内容につきまして、今、皆さんのお話にあったように東京書籍は十分にその役割を果たす、我々の要請に答えてくれるのではないかなと思っております。

○久保教育長 私も東京書籍で良いと思いますし、先ほどご指摘もいろいろありましたけれども、お箸の持ち方については両方ともあるのですが、それから、開隆堂は茶碗の持ち方、東京書籍はお椀の持ち方で、少し違うのですが、あとは配膳例とかもそれぞれ書かれていて、それなりの内容はありますが、東京書籍のほうが絵の組立てがうまいなと思うんです。同じようなことを書いている、同じ場面で、どちらが見やすいかといったら、絶対に東京書籍のほうが見やすいんです。実に上手なんです、そういうところが。開隆堂は白いところに白ですごく見づらいですね。東京書籍はちゃんと裏に表に色をつけて見やすいということが一つ、それから、字も大きいですし、すごくうまい配分がされていて、一つひとつの内容が分かりやすい。書いていることはずっと同じようなことなのですが、実はこっちの特徴、ポイントというのが入っているんです。このポイントというのが、例えば、途中でふたを開けない、水分が逃げないようにするためですよ、それから、火を消すタイミングは鍋の振動がおさまって、少し焦げるにおいがしたときですよというように、感覚的なものも含めて書いてあるのですが、こっちのご飯を炊いてみようでは、それは沸騰したら中火にするとかというふうに、それぞれ書いてあるんです。同じポイントの書き方をしているのですが、こちらのほうが実感的に分かりやすいというふうに思います。そういう点では、実際にあまり調理経験の少ない子たちにそういうことをさせるということであれば、実感的にも分かりやすい形態であるという、こちらのほうが分かりやすいし、絵も分かりやすいというふうに思いまして、私も東京書籍がよろしいのではないかと思います。

1. **高木委員長** 私は東京書籍で注目したのは自由研究のところですよ。例えば53ページ、何か一つ家庭の仕事や月間スケジュールということで、こういう格好で自由研究でやっている。自由研究の形にしなくても、自由研究のところには、いつも「トライカード」というのが入ります。こういうふうにはやれば洗面所のクリーン大作戦ができますよと、同じように、例えば29ページに、家族ミーティングの話が出てきます。それで、その下のところにやはりキャベツのスパゲッティに挑戦するといふときに、トライカードが出てきます。もっと簡単な段階で、21ページではサラダからスパゲッティと、やや複雑になっているという段階を歩むようになっていきます。食べ物ばかりではなく、衣類、あるいは掃除でもこのトライカードというのをベースにしなが、自由研究でいろいろ家庭生活を送る上で掃除とか料理とか、そういうときにかなり役に立つのではないかと思います。本当は実践しなければいけないのですが。そんなふうに感じました。だから、東京書籍で十分だと思います。

もちろん教科書ですから、開隆堂のほうでも先ほどお茶の話が出てきましたけれども、調理の話ですと、12ページとか13ページあたりですとか、流し台の話とか、そういうのは載っているのですが、この自由研究みたいにコンパクトな格好でまとめているというのが分かりやすいかなというふうに思っております。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、家庭科について採択をいたします。家庭科は東京書籍株式会社を採択することにしたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○高木委員長 それでは、東京書籍株式会社を採択することに決定いたします。それでは、引き続きまして、保健について審議をいたします。指導室長、ご説明よろしくをお願いします。

○指導室長 はい。それでは、保健の教科の目標についてご説明いたします。保健の教科の目標は、心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てることとでございます。保健の領域におきましては、健康な生活、身体の発育・発達、けがの防止、心の健康及び病気の予防についての基礎的・基本的内容を理解し、児童自らが課題を発見し、解決する過程を通して、健康安全の大切さに気付くことができることを重視しております。保健の現在使用している教科書は、「株式会社学習研究社」でございます。なお、今回の見本本提示に当たりまして、「株式会社学習研究社が社名変更をしまして、お手元の見本本のなかでは、株式会社学研教育みらいということで見本本の提示がなされております。全5社からの採択をお願いいたします。

○横井委員 それでは、保健ですが、現行の学研を引き続き採用するのが良いのではないかと思います。全5社を通読してみますと、まず、日本文教出版は本文に当たるものがなくて、至って資料集的な感じがします。データはたくさんありますが、どのように学習展開をすればよいかというのが、例えば若い先生には難しいかもしれないなということを感じました。大日本図書は、記入する欄がたくさんあるのですが、その分、資料に当たるものが少なくなりますから、やや中途半端かなというふうに思います。具体的なことは後でまたお話しします。光文書院も、日本文教出版ほどではないのですが、やはり資料集的な感じがする。それから、「何々しましょう」というふうな問いかけで誘導的なものが多いということが少し気になりました。東京書籍と学習研究社は、問題解決的な展開でどうすればよいのでしょうかとか、「何々でしょうか」というふうな問いかけが多くて、展開としては自然かなというように感じます。東京書籍と学習研究社は、本文によって学習展開がスムーズにできるようになっているように読み取りました。東京書籍には、広げよう、学習を振り返ろうというところがあって、その分ページ数も増えております。それで、学習研究社はページ数が最も少ないです。日本文教出版と同じなのですが、怪我への対応だとか抵抗力など、自分でできることへの取組みの扱いが適切かなと思います。それから、学習研究社の39ページを開けていただきたいのですが、この欄外、ページの一番下に、ここにいろいろな細かい情報が書かれています。これは薬物乱用のページですけれども、「もし友達が薬物を乱用していたら、先生や家の人に相談しましょう。乱用している人は自分の力だけでは立ち直れません。早ければ早いほど友達は救われるのです」といったような注釈があるというところが、考えられているなというふうに思いました。全体としては、学習研究社を推薦するという事なんですけれども、細かい点で言うと、3・4年の「育ちゆく体とわたし」に当たる単元を少し見ていて、これ各社ともほとんど大単元名はどれも同じようなタイトルになっています。こ

れで、一つは単元名についてですけれども、東京書籍と日本文教出版と光文書院は「思春期の体」とか、「思春期の体の変化」となっているんですね。それから、大日本図書と学習研究社は「おとなの体」「おとなの体になるじゅんぴ」とか「大人に近づく体」となっています。「思春期」という言葉を使っているのは東京書籍、日本文教出版、光文書院で、「おとなの体になる」というのが大日本と学習研究社なのですが、これ4年生の子どもですから、思春期という言葉の意味がなかなか的確にはつかめないと思いますから、「おとなの体になるじゅんぴ」とか、「大人に近づく体」というタイトルのほうが良いと思います。そういった発達段階を考えると、今の多くのものが、かなり表現が行き過ぎていくところがあるのではないかと思います。もちろん検定を通過しているわけですから、文部科学省もそれでよしとしているのだらうとは思いますが、子どもたちの実態や何かを考えたときに、あまりにもそういった体の変化に対する知識が先行し過ぎるのもどうかと思います。例えば女の子の生理の扱いについてなんですけれども、その説明が4枚の図を使って1か月のサイクルを詳しく書いてある教科書が日本文教出版と光文書院と大日本図書です。学習研究社は1枚の図で簡単に説明してあります。東京書籍は図がなくて言葉による説明になっております。そういった10歳前後の子どもたち、まだ初潮もない子どもが、また、体の仕組みについては理科では5年生でやるわけですから、十分に理解できていない子どもたちに、そういったことは少し難し過ぎる。念のために、今も学習研究社を使っておりますので、現行の教科書を見てみたら、現行は今回多くの他社と同じように4枚の図を使ってサイクルのメカニズムを書いてあるんですけれども、新しい版では1枚の絵に直してあるんですね。ですから、それは実際に教科書として作ってみて、反省が多分あって、そういうふうな修正をしたのではないかというふうに考えられますが、それは私は妥当な方向転換なのではないかと思っておりますので、そういった会社の方針も含めて、それは受け入れられるなというふうに思っております。ほかの問題についてもいろいろ学習研究社の扱い方が妥当ではないかなというふうに考えられます。

○久保教育長 先ほど申し上げましたように、全体として見て、最初に比較的良いなと思えたのは学習研究社と大日本図書ですけれども、ほかのも大体皆さんもうそれぞれ中身としては固まって、それなりに中身が網羅されていて、それほど大きな差がないのではないかという気はいたしました。そういう点では現行のものを変える必要はないかなという気もするのですが、先ほど横井委員が指摘されました件ですと、3年生の中で、いわゆる大人の体を準備するんだという表現のほうが私も妥当だというふうに思いますし、使っている絵の内容を見ますと、着衣型のものとは着衣でないものとで分かれていまして、大日本図書と学習研究社は着衣型なんです、体の示し方が。残り3社は着衣ではない形で示してあって、ここがこうなりますという形で吹き出し型に整理をしていて、分かりやすいといえれば分かりやすいのですが、そこまでしなくて分かるものは分かるという気もいたしまして、別にどちらでも理解の内容が変わるものではないとすれば、具体的な姿を示す必要はないのかなというふうには思いました。そういう点では横井委員のご指摘はもっともかなというふうに思います。それから、全体としてこの書かれているいろいろな事柄の中で、やはり大事なことは健康な体を守っていくということだろうと思います。そういう点では食・生活習慣だとか、そういうことについて、怪我の予防とかも含めて、それぞれ整理がされていますが、そういう視点でよくまとまっているのは、やはり学習研究社が一番まとまっているのかなと私は思いましたので、学習研究社でよろしいのではないかなというふうに思いました。

○高杉委員 保健については、学習研究社は紙質、それとイラストのうまさというか効果的な配置とか

写真の配置、それと本文の文字、大事なところを少し太めで表記したり、いろいろな工夫をしております。ほかのものに比べると、学習研究社が一目でレイアウトの良さとか、写真のきれいさが際立っているなど感じました。ほかのいろいろな工夫については、横井委員や久保教育長と同様なのですが、やはり教科書を子どもたちに自然に読ませるといふか、見させるという工夫がこの学習研究社には顕著に見られると思うので、学習研究社で良いのではないかと私は思います。

○鈴木委員 私はやはり基本的な生活習慣の中で睡眠の記述にかなりこだわったのですが、実は各社結構ばらばらなんだということが分かりました。例えば光文書院は28ページ、睡眠は私たちの成長にとっても大切な役割を果たしています。成長ホルモンが出る育ち盛りの頃は9時間から10時間しっかり睡眠をとるようにしましょうとなっています。学習研究社は8時間から9時間なんですね。24ページにチェックポイントがあって、早寝・早起きして8時間から9時間ぐらい寝ているというふうに書いてあって、今、実際文科省のデータ等でも3・4年生、5・6年生がどのぐらい寝ているかという、基本8時間から9時間なんです。10時間実際寝ている子は幼児でも少ないんです。それが一つと、成長ホルモンの記述ですが、一つ文教出版は、成長ホルモンが出ることによって成長しますというようなことで、十分な休養、睡眠をとると疲れがとれ、元気になる。物事に集中できるって、体が成長すると言っておきながら、疲れがとれて元気になって物事に集中できるという形なので、そういう意味での記述からいうと、東京書籍が一番丁寧かなというふうには思いました。ただ、子どもたちは自分たちの生活をどう考えているかというようなことを考えると、私もやはり学研の「チェックしてみよう」というところはすごく重要で、運動して疲れたときはしっかりと休むとか、早寝・早起きをして8時間から9時間ぐらい寝ているとか、そういうようなことを自分の生活として認識できるかということが一つ。そして、先ほど横井委員からもお話がありましたが、下のところに「脳からは体を成長させるホルモンが出ます」、「体を成長させるホルモンは眠っている間にたくさん出ます」とありますが、そのとおりです。ですので、こういうちょっとした一言メモ、知識と同時に、自分の生活を結び付けていくということが大切なのではないかとこのように思います。学習研究社がよろしいのではないかと思います。

○高木委員長 まず、全体的な印象としては、5社ですが、みんな似ているんですね。睡眠の話にしる、体の変化の話にしる、それから、薬物の話にしる、みんな載っています。しかも、差をつけるほうがなかなか難しいような、そんな感じなので、私は無理に変える必要はないのではないかと思います。個別の項目を見ると、それぞれ差があるんですね。けれども、全体的に見たときに、それほど大きな差があるとは思えません。先ほどの体の変化にしても当然ですが、裏側に心の変化というのがありますよね。心の変化の書き方が多少違ってきます。例えば学研ですと21ページですが、漫画になっていますのである程度分かりやすいと言えます。文教社は、こちら21ページですが、こちらのほうは1年生から6年生まで出ているんですね。だから、その点においては学研より良いと言えます。ところが、今度は体の話になってくると、また性質が違って、文教社のほうは19ページに、かなり具体的な形で書かれています。だから、アクセントの付け方によって差があるように見えるのですが、全体として見たとき、それ程大きな違いはない。私も学研で構わないと思います。

○高木委員長 それでは、議決事項第1議案第60号「平成23年度使用墨田区立小学校教科用図書の採択について」のうち、保健について採択をいたします。保健は株式会社学研教育みらいを採択することにしたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○高木委員長 それでは、株式会社学研教育みらいを採択することに決定いたします。以上ですべての教科等について採択が終了いたしました。

議決事項第2

議案第61号「平成23年度墨田区立学校特別支援学級における学校教育法附則第9条図書の採択について」の案件を上程し、指導室長が説明する。

○高木委員長 これについては現場に任せるべき部分が多いと思います。これでよろしいかと思いません。

○高木委員長 そのほかご質問はございませんか。よろしいでしょうか。それでは、議決事項第2、議案第61号「平成23年度墨田区立学校特別支援学級における学校教育法附則第9条図書の採択について」は、原案どおり採択することにしたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○高木委員長 それでは、原案どおり決定いたします。以上で予定の議決事項はすべて終了しました。これで教育委員会を閉会します。